

STAYFREE 短編集



STAYFREE

- ・ 売店のおばちゃんとチョコレート
- ・ 365本の花
- ・ 雪だるまの奇跡
- ・ かさ
- ・ 一番綺麗なひまわり
- ・ 最後の日
- ・ 人生最期の言葉
- ・ ボタン
- ・ お菓子
- ・ 最後の運転

売店のおばちゃんとチョコレート

午後三時から九時までの六時間、私は駅の売店で働いている。毎日、多くのお客さんがお菓子やジュースや新聞を買っていく。お客さんが商品を置いて、私がお金をもらう。そのやり取りは二十秒ぐらい。でも、そんなわずかなやり取りにも、お客さんとのつながりを感じて、心が震えてしまう時がある。

いつも夕刊を買っていく、小学生の女の子がいる。私立の学校に通っているのだろうか？ ランドセルではなく普通のカバンを右手に持ち、立派な仕立ての制服を着ている。午後四時ごろ、その女の子は私の売店で夕刊と、たまにチョコレートを一緒に買っていく。小学生の女の子が夕刊？ ちょっと気になっていたの、女の子に声をかけてみた。

「この新聞、あなたが読むの？」

「いいえ、これはお父さんが読むんです」

「そうなんだ。じゃあ、お父さんのために買って行ってあげているんだね」

「うん。お父さんが家に帰ってきたら、今日もお疲れ様ですって言ってわたしが渡すの」

「そうかあ、偉いねえ。お父さん喜ぶでしょう」

「うん。それでね、今日は学校の勉強はできたかって、わたしに聞いてくれるの。わたしが学校であったことを話すとお父さんはうれしそうに聞いてくれて。あと、新聞と一緒に買ったチョコレートも二人で食べるの。お父さんは甘いものが大好きだから、喜んでくれるんだ。それで、お父さんはお休みがほとんどなくて、いつも忙しそうだから、お話しできるのはこの時ぐらいなの」

今はこんな家庭が多いのかなあと思う。でも、この子はまだ幸せだろう。たとえ少しでも父親と話す時間があって、私の娘には幼いころから父親のいない寂しさを味あわせてしまった。私は娘が六歳の時に離婚している。

電車がホームに入ってきた。

「じゃあね」と女の子に声をかける。

「さようなら」女の子は笑顔で走って電車に乗っていった。

この日以来、この女の子が来るといつも一言、二言、会話を交わすようになった。自分の娘にもこんな頃があった。なつかしい。今、娘は三十二歳になっているはず、でも、言葉を交わすことは全くない。

私が夫と別れてから、娘は心を閉ざしてしまい、中学生になると非行に走るようになった。その後、十六歳で彼氏との間に子供ができてしまい、連絡先も伝えずに家を出て行ってしまった。その後、娘は全く連絡もしてくれなくて、音信不通の状態が続いている。

次の日、平日にもかかわらず、女の子は姿を見せなかった。風邪でも引いて学校を休んだのだろうか。次の日、その次の日も女の子は現れなかった。そして、そのまま二週間が経った。今は夏休みでも冬休みでも春休みでもない。学校はあるはずなのに――。

今日は来てくれるかな。祈るような気持ちで次の週の月曜日を迎えた。女の子は夕方四時にホームに姿を見せてくれた。あの子だ！ 私はそれに気づき、ホッとして女の子が店に近づいてくるのを待っていた。

……でも、女の子は売店には寄らずにそのまま電車に乗ってしまった。私は思わず、店から飛び出して声をかけようと思ったが、ほかのお客さんが来て遮られてしまった。

なんで、今日は夕刊を買わないで行ってしまったのだろう。お父さんにもういらないうっていわれたのだろうか。

翌日、いつもの時間に女の子はホームに姿を見せた。私は、店から出て女の子に話しかけた。

「こんにちは」

「こんにちは……」

返事をした女の子の顔に笑顔はなかった。

「新聞、もう買わないの？」

「うん。もう買う必要がなくなっちゃったの……」

そう言うと、女の子は目に涙をためて、今にも泣き出しそうな表情になってしまった。

「どうして？」

「お父さん、交通事故で死んじゃったの。もういないのお父さん。新聞も渡せなくなっちゃった」

「えっ……」

私は何も言えなかった。ショックだった。とても悲しくなり、涙がボトボト零れ落ちてしまった。

「どうして、おばちゃんが泣くの？」

女の子は不思議そうな顔で私を見つめる。

私は堪らなくなって、女の子を抱きしめた。私に抱きしめられた瞬間に女の子もしくしくと泣き出した。そのまま、ホームの真ん中で五分ぐらい抱きしめていた。周りの目など全く気にならなかった。

次の電車が来た時に女の子は私の腕から離れた。

「もう帰らなくちゃ」

「うん、ごめんね。元気出しなよ」

「ありがとう」

女の子が言ったこの一言が胸に沁み込んだ。一度落ち着きかけた涙腺がまた刺激された。

「頑張ってるね」

「うん！じゃあね。バイバイ！」

「バイバイ！」

この後、女の子は新聞を買うことはなくなったけど、小学校を卒業するまで、毎回、私の売店に来てくれた。会話はいつも取り留めのない話ばかりだったが、とても心が癒された。孫がいたらこんな感じなのだろうと、寂しさを紛らわすことができた。

そして、もう一人、いつも気になっているお客さんがいた。きっと、私の娘と同年ぐらい。

仕事の帰りなのだろう、夜七時ぐらいに時々、チョコレートを買っていくOLさん。

職場で辛いことが多いのだろうか、彼女がチョコレートを買っていくときはいつも暗い顔で悲しい表情をしている。

勝手だけれど、私はまるで自分の娘のように彼女のことを気にかけるようになってしまった。でも、小学生の女の子のように声をかけるのは、勇気のいることだった。厳しい世の中だし、今の若い子は特に辛いことなどなくても、こんな感じなのかもしれない。そう思っていた。

※※※

最近、駅の売店でチョコレートを買うようになった。落ち込んだ時に。

普段は甘いものはあまり食べない。でも、辛いことがあった時は甘いものが、特にチョコレートが食べたくなる。昔から、気持ちが落ち込んだ時には食べ物や音楽やドラマや物質的なもので、気持ちを紛らわせてきた。相談事をするような友達もいない。恋人なんてもちろんいなくて、わたしはいつも一人ぼっちだった。

仕事の帰りの地下鉄の乗換駅。小さな売店で、うつむき加減で、何も言わずに赤いパッケージのミルクチョコレートと百円玉と十円玉をトレーに置く。

「はい、五円お返し」

いつもこの売店でチョコレートを買う。売店のおばちゃんの顔も覚えてしまった。どこにでもいそうな五十代ぐらいのおばちゃん。

三路線が乗り入れるこの駅には乗降客でたくさんの人がせわしなく行きかっている。上りの電車、下りの電車が到着する度にたくさんの人が電車の中から飛び出してくる。これだけたくさんの方がいるのに皆、わたしと同じような生気のない表情をしているように見える。

電車に乗る前にチョコレートのパッケージを開けて一粒、口の中に入れた。いつも買うこのチョコレートは一口サイズのチョコが十二粒入っている。

甘い。朝から苦い思いしかなかったわたしの脳みそが今日初めて感じた甘いという感覚だった。

二粒目を口に入れる。そして、ため息をつく。仕事でミスをした。取引先に大変な迷惑をかけてしまった。単純な発注ミスだった。部長に怒られた。次にミスをしたらクビだと言われた。この能無しが！と怒鳴られた。

三粒目を口に入れた。電車が突然、急ブレーキをかけた。手に持っていたチョコレートはわたしの手から抜け落ち、床に落ちた。残っていた九粒はすべて床に散らばってしまった。

電車は動き出して、自分が降りる駅へと到着した。わたしは自分がばら撒いてしまったチョコレートを拾う気力もなく、そのままの状態ホームに降りた。

それから二週間後、わたしはまた売店でチョコレートを買った。売店の店員はいつもと同じおばちゃんだった。わたしはまたうつむき加減で何も言わずにトレーに赤いパッケージのチョコレートと百円玉と十円玉を置いた。

「はい、五円お返し」

おつりを手に取り、おばちゃんの顔をちらりと見る。おばちゃんはずいぶん心配そうな顔をしている。気のせいだよ。心の中でつぶやき、わたしはまた下を向く。

わたしにはひそかに思いを寄せていた男性がいた。同じ部署の三歳年下の男性。いつも明るくて、元気で、頭が切れて、仕事もバリバリこなし、人当たりもよく、稚拙な表現だけど太陽のような笑顔をもったさわやかな男性だった。

そして、彼は自分の周りの皆にやさしい、思いやりのある男性だった。それは美人でもかわいくもない、何のとりえもないわたしにも……。

一週間前、私は風邪をひいて体調を崩してしまった。朝起きて、体温を測ると熱は三八度一分。何でも無い普通の日であれば、仕事を休ませてもらうところだったが、その日は大事な会議があり、休むわけにはいかなかった。

しかも、その会議は彼がリーダーで、社運のかかった……とまではいなくてもとても重要なプロジェクトの会議だった。

わたしは無理を押し出して出社をし、会議にのぞんだ。意識は朦朧としていたが、会社の為に……、いや、好きな人の為にすこしでも力になるのだと、頭がい骨の中心から頭の中を四方八方に広がる痛みを耐え、胃からせり上げてくる、無情で非情な吐き気と闘いながら必死に会議室の椅子にへばりついてた。

会議が始まり、十五分が経過した。では、資材調達のコストとその実用性について、斉藤のほうから説明させていただきます。

名前を呼ばれ、立ち上がったその時だった。必死に闘っていた、無情で非情な生理現象にわたしは屈してしまった。会議室の机の上に液体が滴りおちる。会議室の中に酸性の嫌なにおいが立ち込める。

「斉藤さん！ 大丈夫ですか？ 体調、悪いんですね？ すぐに医務室に行きましょう」

ざわつく重役たちの視線を遮るように彼はわたしの横に立ち、わたしの腕を優しくつかみ、会議室から出て医務室へ連れて行ってくれた。

「ちょっと、顔が赤いなあとは思っていたんですけど、気づかなくて本当にすみません」

わたしのような人間にこんなにやさしい言葉をかけてくれた男性が今までにいたろうか？

わたしは彼に恋をしてしまった。でも、それは叶わぬ恋だった。

彼が皆の前でわたしの同期の女性と結婚をすると報告をした。大事なプロジェクトの途中でこんな報告もどうかと思ったのだけどと彼は言っていたが、同僚は皆、びっくりした顔で二人のことを祝福した。二人が結婚するような関係であったことにわたしはもちろん、誰一人として気づいていなかった。わたしは彼への思いが叶うなどとは夢にも思っていなかったが、やはりショックだった。わたしがひそかに思いを寄せていたことなど、彼は知る由もなかったらうー。

わたしは失恋した。これが今日チョコレートを買った理由。

電車に乗る前にチョコレートのパッケージを開けて一粒、口の中に入れた。甘い。ただ、甘いという味覚しかない。その“甘い”は自分が持っているどの感情とも結びつかなかった。

ホームに電車が到着する。いつもはたくさんの方が降りてくるのに、なぜか今日はあまり人が降りてこない。

電車に乗り込んだ。でも、なかなか電車は発車しない。どうやらひとつ先の駅で、何かトラブルがあったようだ。

二粒目のチョコレートを口に入れる。何も感じない。三粒目、四粒目、甘いはずのチョコレート、美味しいはずのチョコレートなのに……。わたしは自棄になって、残っているチョコレートをすべて口の中に放り込んだ。

まわりの乗客がちりちりちりとわたしを見る。わたしの口の中はチョコレートでいっぱいになり、頬は限界まで膨らみ、やがて目にはうっすらと涙が浮かんでくる。

わたしは電車から降り、ホームにある水飲み場の排水溝に口の中に残っているチョコレートをすべて吐き出した。さっき、チョコレートを買った売店のおばちゃんがわたしのもとに来て背中をさすってくれた。おばちゃんは何も言わずにただ、私の背中をさすってくれた。

でも、わたしはチョコレートをすべて吐き出しても涙が止まらなかった。

※※※

今日もあの子は辛そうな顔をして、チョコレートを買っていった。職場で何かあったのだろうか？ それとも、失恋でもしたのだろうか？ 友達に裏切られたりしたのだろうか？ 前に見た時より、げっそりとしていて、痩せてしまっていたように見えた。

いつものようにチョコレートを買って、電車に乗り込んでいく彼女を私は横目で見ていた。電車に乗る前にチョコレートを一粒食べた。電車に乗り込んでから、二粒目、三粒目、今にも泣きそうな顔で次々とチョコレートを口に入れている。

涙目になって、彼女は電車から降りてきた。水飲み場の排水溝でチョコレートを吐き出している。それをみて、私は居た堪れない気持ちになり、彼女のへ行き、背中をさすってやった。何があったのかはあえて聞かなかった。

彼女は次の電車に乗り、家へと帰って行った。

※※※

また……わたしは駅の売店でチョコレートを買った。翌日のことだ。理由は何もない。いや、自分が嫌だから。嫌いだから。情けないから。自信がないから。

売店の店員はいつもと同じあのおばちゃんだった。売店の前に立って、手をのぼそうとしたわたしに、赤いパッケージのチョコレートを手に持っておばちゃんが言った。

「これだね」

「……」

わたしは何にも言葉を返せなかった。

「元気出しなよ。そんなに辛いことばかりじゃないよ。頑張っていれば必ず、いいことがあるから！」

「……」

温かった。おばちゃんの言葉がとても温かくて胸にジーンと沁みた。でも、不思議と涙は出てこなかった。

トレーに百円玉と五円玉を置いた。お釣りが無いはずなのに、おばちゃんはわたしのほうに手を伸ばしてきた。

おばちゃんの手がわたしの手を優しく包み込んだ。おばちゃんは何も言わずに穏やかな笑顔で一度、頷いた。

「……ありがとう」

ちいさな、ちいさな声でわたしはそう言った。おばちゃんはわたしの顔を見てもう一度頷いた。

電車が来た。私はなぜかチョコレートのパッケージを開ける気にはならなかった。

※※※

その日は私の方から彼女に話かけてしまった。黙っているのが耐えられなかった。自分の娘を見ているようで、放っておけなかった。気の利いたことは何も言えないけれど、何とか少しでも元気を出してほしい。もし、複雑で冷たい人間関係の中で孤立しているのなら、少しでも人の温もりを感じてほしい。そう、思った。

口に出しては言わなかったけど、“あなたはまだ若いよ、これからなんだから、笑顔で前向きになりなさい”そんな思いを込めて、彼女の手を握って微笑んだ。

「ありがとう」小さな声で彼女は言った。私は自分の娘から言われた最後の“ありがとう”を思いだそうとした。あまりに昔のことでそれがいつのことだったか思い出せなかった。

私は彼女が買ったのと同じ、赤いパッケージのチョコレートの封を開け、一粒口に入れた。

※※※

いつも乗っている帰りの電車は昨日とは違う空気が流れている気がした。さっきの売店での出来事が、自分の感覚を変えてしまっているのかもしれない。電車が自宅の最寄りの駅に到着した。売店で買ったチョコレートは未開封のままバックに入っている。

駅から出て、自宅までの道を歩く。私の横を自転車に乗ったサラリーマンがなかなかのスピードで追い越していく。さらにその横の片側四車線の大きな車道を大きなトラックがかなりのスピードで追い越していく。

わたしは普通なら自宅まで徒歩十分の道を倍の時間をかけて歩いた。帰り道を歩くときはいつも、暗いことばかり考えていた。でも、今日はなぜだか少しだけ気持ちが落ちついている。

自宅に着いた。バッグをベッドの上に放り投げて、冷蔵庫を開けて牛乳をだし、コップに注ぐ。

牛乳を一口飲んだら、甘いものが欲しくなった。わたしは、はっと思い出してバッグの中から駅の売店で買った赤いパッケージのチョコレートを取り出した。

パッケージを開けて、一粒口の中に入れる。

「おいしい」思わず声が出る。

「……おいしい」胸が詰まる。

「おいしいよおおおっ……」涙があふれる。

その時のわたしの頭の中に駅の売店のおばちゃんのやさしい笑顔が思い浮かんだ。

わたしは赤いパッケージのチョコレートをすべて食べきった。食べきることができた。

次の日、わたしはまた、駅の売店でチョコレートを買った。トレーに赤いパッケージのチョコレートと百円玉と五円玉を置く。その時のわたしは、ほんの少しだけ、笑顔を浮かべることができた。

※※※

次の日、彼女はまた売店にやってきた。でも、いつものような暗い顔ではないような気がした。彼女はいつもと同じチョコレートと百円玉と五円玉をトレーの上に置いた。

その後、彼女はほんの少しの笑みを浮かべた。彼女のその顔を見て、私は決心した。自分も前向きになろうと、ずっと連絡が取れない娘を何とかして探し出そうと……。

365本の花

水曜日のある日、花屋の店の前に一人の男の子が呆然と立ち尽くしていた。

店はシャッターが閉まり、本日定休日の札がかかっている。男の子はそれに気付かないのか、それとも無視しているのか、開くはずのない店の前にただ立ち尽くしていた。

やがて、雨が降ってきた。それでも男の子は店の前から動こうとはしなかった。隣の八百屋の主人が怪訝な顔で男の子に話しかける。

「ぼく、どうしたんだい？今日は花屋さんお休みだよ」

「お花、どうしてもお花がほしいんです」

「駅前のお花屋さんなら今日はやってるはずだよ」

「ここのお店の花じゃないとだめなんです」

「どうして？」

「……」

「でも、今日はお休みだからお店の人は来ないよ」

「どうしてもこのお店のお花がほしいんです」

意地でも店の前を動こうとしない男の子に八百屋の主人は困り果ててしまった。

「ちょっと、待っててね。花屋さんに電話してみるから」

八百屋の主人は一度店に入り、傘を持ってきて男の子に渡した。そして電話をかけ始めた。――僕の携帯電話の着信音が鳴った。八百屋の主人からだった。

なんだろう？八百屋の主人から携帯に電話が来るなんて初めてだよな。店でなにかあったのかな……。

戸惑いながらも、僕は携帯電話の通話のボタンを押した。

「あっ、斉藤さん？お休みのところ悪いね。君の店にいつも花を買いに来る男の子がね、さっきから雨が降っているのにずぶぬれになって、君の店の前に立っているんだよ。どうしても君の店の花が欲しいみたいなんだ。何を言っても帰ろうとしないんだよ。もし来られるなら、ちょっとだけ店を開けてやってくれないか」

「わかりました。今すぐ行きます。」

僕はすぐに自宅を出て、自分の店へと向かった。

八百屋の主人の言うとおりに、男の子は自分の店の前で雨に濡れたまま、真剣な目でシャッターを見つめていた。その表情には何か決意のようなものが感じられた。

「ぼく、どうしたの？今日は花屋さんお休みなんだ」

「お花、お花売ってくれないか？」

「構わないけど、他にもお花屋さんはあるのにどうして僕の店の前で待っていたの？」

「お母さんが、お母さんがいつもこのお店で花を買っていたから」

「君がお母さんの代わりに毎日花を買いに来ているの？お母さんはどうしたの？」

「……」

男の子はその問いかけには答えなかった。

「まあ、いい。そのままじゃ風邪を引いちゃう。今すぐに店を開けるから。さあ、中に入って。濡れた服を乾かさなきゃ」

「ありがとう。でも、時間がないの。」

時計は11時30分を指している

「急いでいるの？」

「うん、午前中のうちにこの花を持って行かなくちゃいけないの」

「どこに？」

「……」

さっきと同じように男の子はその問いかけには答えなかった。

「じゃあ、ちょっと大きいけど、これを着ていきな」

僕はずぶぬれになった男の子のシャツを脱がせて、店に置いていた自分の着替え用のシャツを着せた。小さい男の子の身体にはダブダブだったが、余った生地を絞って腰のところで片結びをし、何とか格好をつけた。

「お花……」

「そうだったね、じゃあこれ100円です」

「お店、開けてくれてありがとう。じゃあ、行ってきます」

男の子がどこに行くのかはわからなかったが、いってらっしゃいと声をかけ見送った。

――初めてこの男の子が店に来たのも今日と同じような強い雨が降っている日だった。午前10時40分、毎日同じ時間に花を1本買っていく。小学生のように見えるが学校には行っていないのだろうか？ 不思議に思っていたが、直接聞くことはしていなかった。

次の日、やはりいつもの時間に男の子はやってきた。でも、何か様子がおかしかった。顔がほんのり赤くて元気がない。

「お花をください」

声も普段より弱々しかった。熱があるんじゃないか？僕は男の子のおでこを触ってみた。思ったとおりだ。

「ダメじゃないか、こんなに熱があるのに外に出たりしたら」

「でもお花を、お花を持っていかなきゃ」

「どうしても持っていかなきゃいけない理由でもあるの？」

「お母さん、お母さん……」

僕の問いかけの答えにはなっていなかったが話すのも辛そうなので、それ以上は聞かなかった。

「わかった。じゃあ僕がおんぶして行ってあげるからいっしょに行こう」

男の子に花を1本渡し、店のシャッターを半分閉め、男の子をおんぶして店を出た。

「どこに行けばいい？」

「あそこの角を右に、次の信号を左」

しばらく歩いたところで男の子は言った。

「もうここでいいよ。ありがとう」

「ここでいいの？道の真ん中で何にもないじゃないか」

「もう近くまで来たからいいの」

「帰りはどうするの？1人じゃ帰れないだろう？」

「大丈夫」

「大丈夫じゃないだろう」

「……」

「わかった。じゃあここで待っているから目的のところへ行っておいで」

「うん、ありがとう」

僕はこっそり男の子の後をつけた。どこに行くのか興味があったのはもちろんだが、身体が大丈夫か心配でもあった。

男の子を下した場所から5分ほど歩いた。男の子は両側に色とりどりのあじさいが咲いている垣根の間を進んでいった。階段を数段のぼり、ちょっとした高台に男の子の姿が見えた。

その場所はお墓だった。男の子が立ち止ったそのお墓には6本の花がかざってある。

これはあの子のお母さんのお墓なのかな。お母さんは何かの理由で亡くなったのかもしれない。僕は男の子を下した場所に戻り、何も知らない顔で声をかけた。

「用事は済んだ？」

「うん」

「じゃあ帰ろう。」

戻ってきた男の子の顔は赤みが消えてスッキリしているように見えた。もう一度、男の子のおでこに触ってみると熱はすっかり下がっていた。

「もう、大丈夫。1人で帰れるから」

「元気になったみたいだね」

「うん、今日は本当にありがとう」

「じゃあ、気をつけて帰るんだよ」

男の子が毎日花を買いに来ている理由がわかった。午前のうちにお墓参りに行かなきゃいけないなんて、おばあちゃんからの教えなのだろうか。

ただ毎日学校にも行かず、体調不良をおしてでも、墓参りを欠かさないのは何か特別な想いがあるのではないか。男の子の事情に深入りする権利などないが、僕はそれが何なのか知りたくで仕方がなかった。

それ以来、僕は定休日の水曜でも通常の開店時間に店を開け、男の子が花を買いに来るまで営業することにした。

「あのさあ、毎日花を買いに来る男の子のことなんだけど……」

次の日の朝、店を開けてすぐに隣の八百屋の主人が話しかけてきた。

「あの男の子、うちの孫と同じクラスの子だったんだよ。こないだ、あの男の子が花を買いに来た時に孫が見ていたね。男の子のことを教えてくれたんだ。どうやら母親を病気で亡くしたみたいだ。それから学校へ行かなくなってしまったみたいでさあ」

「やはり、そうだったんですか……。お母さんをなくして相当、ショックだったでしょうね。」
八百屋の主人からその話を聞いて、僕は8年前に亡くなった自分の母親のことを思い浮かべた。

母親は実家の庭で花を育てるのがとても好きだった。朝顔、菊、千日紅、クレマチス、ヒガンバナ。たくさんの種類の花が我が家の庭にはきれいに咲いていた。

僕は家の庭のきれいな花を眺めるのがとても好きだった。天気の良い日は太陽の光を浴びて輝いている花を何も考えずにのんびりと眺めたり、雨の日には雨粒が花びらに残り、透き通った水滴が浮かんで見えるその光景にとっても癒されたり――。

ある夏の日。学校から帰ってきて自分の家の庭を何気なく見ると、いつもは生き生きと咲いている花たちが皆しおれて首をもたげていた。地面は乾ききって肌色になりいつもとは違う色だった。

その理由はそのあとすぐに分かった。いつも花に水遣りをしている母親がいなくなっていたからだった。

母親はその日、突然家を出て行った。

“しばらく、戻りません”

その一言だけが書かれた小さなメモ紙と、普段は飾られていない白くて小さい花がたくさんついた植物が花瓶に生けられてテーブルの上に置いてあった。理由は全く分からなかった。

父親との間に何かあったのだろうか？ いや、それも特に思い当たることはなかった、息子の自分から見て、両親は普通に仲が良いように見えていたからだ。

母親から家に連絡が来ることはなかった。そのまま、1年半の月日が流れた。

そしてある日、まったく知らない東京の病院から電話があった。母親が事故で亡くなったとの知らせだった。

その時の僕には母親がなぜ東京に行ったのか、なぜ家族のもとを離れたのか、まったく想像がつかなかった。

僕は高校を卒業して上京し、花屋でアルバイトを始めた。母親が出て行ってからは僕が実家の庭の手入れをしていた。その経験を生かして、花屋で働きたい。そう思ったのだ。

そして、花屋でバイトをして花のことを勉強してわかったことがあった。母親が家を出て行った日にテーブルに生けられていた白い花はユキヤナギ。その花言葉は“自由”。母親は自分の人生のために家族を捨てて出て行ったのだと思った。無理やりにもそう解釈することにしたのだ――。

男の子が花を買いに来て3ヶ月が経ったある日のことだった。その日は水曜日。男の子は普段と変わらず花を買いに来た。

その後、僕は店を閉めて用事を足そうと家とは反対の方向に歩きだした。するとその途中、右手にぼろぼろになった花を持ち、下を向いて泣いている男の子を見かけた。

あれは――。

「どうしたの？こんなに傷だらけになって」

「同じクラスの子に殴られたんだ……」

こみ上げる嗚咽の中、男の子は振り絞って声を出した。

「どうして？」

「おまえ、男のくせに花なんかもってどこに行くんだよって。女みたい。バカじゃないのって言われたんだ。僕、許せなくて殴ろうとしたんだけど、逆にやられちゃった……」

「弱いから、僕」

「花、持って行く途中だったんだね？」

「うん……」

ふと、時計を見た。時計の針は11時30分を示している。

「ちょっと、待ってて、すぐに新しい花を持って来るから」

僕は急いで店に戻り花を1本、バケツから抜いて男の子の元へ急いだ。

「これを持っていきなよ。あと20分しかないけど間に合うかい？」

「うん、ありがとう！」

涙を拭って男の子はお母さんのお墓の方に向かって行った。僕は男の子が走っていった方向と同じ方に歩いて行った。その先にある本屋へと本を買いに行く途中だったのだ。

でも、男の子は自分の目的を隠している。理由はわからないが気づかないようにしないといけない。そう思い、男の子に見つからないように注意しながらお墓の横を歩いた。

男の子はお墓の前で座っていた。僕が持ってきた花はもうすでに花挿しに挿したようだ。その花を見て僕は不思議に思った。もうお墓に生けられてから3ヶ月が経つ花が、すべて生き生きと咲いており1本も枯れていないのだ。

誰かが新しい花と交換しているのだろうか？それならば男の子に気づかれてしまいそうだけど。

そして男の子に目を向けると、彼は座り込んで何かの本を読んでいるようだった。表紙のタイトルだけ見えた。

「おはながよぶきせき」

あの子にとって大事な本なのだろうか？なぜお墓の前で読んでいるのだろうか？あの本を探してみよう。そう思って、その場を離れた。

本屋に着いて、僕はまず自分の目的の本を手にとった。そして絵本のコーナーへ行った。あの子が読んでいた本はと、あった。これだ。

「おはながよぶきせき」

そういうことだったのか……。

僕はこの本を読んで、男の子が毎日欠かさずにお墓参りに行かなければいけない理由がわかった。

お母さんに蘇って欲しい――。1年間365日、毎日墓参りに行って花を手向ければお母さん

が蘇る。

そのことを誰かに知られてしまうと奇跡は起きなくなる。絵本にはそう書かれていた。お花が呼ぶ奇跡を彼は信じているのだ。

シャッターが閉まった店の前で雨に濡れて待っていたのも、熱があつてふらふらなのに墓参りに行こうとしたことも、友達に馬鹿にされて怒ったことも、すべて死んでしまったお母さんに蘇ってほしいからだった。

僕は2冊の本をレジに持って行った。絵本を買ってしまったのは涙でページを濡らしてしまったからではない。僕もこの本が好きになってしまったからだ。

月日は流れた。

男の子は1日も欠かさずに花を買いに来た。そしていつもの方向に歩いて行った。風が強い日も、雷が鳴っている日も、大雪の日も、墓参りを欠かすことはなかった。

このまま365日経っても、実際に男の子のお母さんが蘇ることはない。でも、僕はその事実を教えてあげることはできなかった。

大人として、絵本の物語を信じて学校にも行かずに毎日を過ごしている男の子に何も言わないのは非常識なのかもしれない。でも、男の子の決心をつぶすようなことはできなかった、

そして、とうとう1年が経った。365日が経ったのだ。

365日目の今日、僕は開店時間より2時間も早く店に来てしまった。早くあの男の子が来る時間にならないかとそわそわしていた。

男の子はいつもの時間にやってきた。彼の顔はシャッターの前で立っていたあの時のような凛々しい表情だった。

「お花を、お花を2本ください」

「2本？今日は2本なの？」

「うん」

「はい、じゃあお花2本だね」

すると、男の子は受け取った花のうち1本をすぐに返してよこした。

「どうしたの？ これじゃあ嫌なの？」

「ちがうよ。いままで、いろいろと助けてくれてありがとう。これはお礼です」

「……」

僕は花屋をやっているが人から花をプレゼントされたことはあまりなかった。花をもらう喜びなど忘れていた。

でも、男の子からの花のプレゼントは他の誰からももらうよりも気持ちのこもったもののように感じた。

「ありがとう……。とってもうれしいよ」

そう言った僕に男の子は照れたように笑った。その笑顔はとても、とても素敵だった。

「じゃあ、気を付けてね」

「うん」

男の子はいつもの方向にお母さんのお墓にむかって歩いて行った。男の子が見えなくなると、僕

はすぐに店を閉めた。今日は水曜日ではないが、臨時休業の紙をシャッターに貼り付けた。そして、お墓の方に向かって歩き始めた。

お墓はたくさんの花で覆われていた。365本もの花が花挿しに入りきるはずもなく、入りきらないものはお墓の前面に立てかけられていた。たくさんの花は枯れることなく、今まで見たこともないぐらい綺麗に咲いていた。信じられない不思議な力が働いているようだった。

男の子はちょうど365本目の花を手向けるところだった。その花を手向けてもお母さんが蘇ることはない。

男の子は絶望してしまうのだろうか――。悲しくてせつない想いがこみ上げてきて、僕はうつむいてしまった。

そのときだった。お墓のてっぺんから何か光のようなものが飛び出した。その光は男の子を優しく包みこんだ。

僕には聞こえてきた。その光が発する声が。男の子と話しているようだ。

「ゆうくん」

「お母さん！生き返ったの？」

「いつもお母さんに会いに来てくれてありがとう。綺麗なお花を持ってきてくれてお母さん、とってもうれしかった」

「うん！僕、お母さんがいなくなって寂しくて……。会いたくて、会いたくて……」

男の子の声は涙声だった。

「お母さんはゆうくんのことずっと見ていたよ。たくさん、辛い思いをさせちゃったね。本当にごめんね。でもね、お母さんはゆうくんのそばに戻ることはできないの。」

「お母さん……」

「それにね、ゆうくん。ゆうくんが毎日お墓に来てくれるのはうれしかったけど、明日からは毎日来なくていいのよ。お母さんはゆうくんが普通に生活している姿が見たい。学校に行って勉強して友達と遊んで、笑顔でいっぱいゆうくんの顔が見たいの」

「うん……」

「だから、明日からはちゃんと学校に行きなさい。勉強してテストで100点取ってその時はお母さんに見せに来てちょうだい。体に気をつけて、頑張るよ。ゆうくんならどんな辛いことでも乗り越えられる。どんなことでも最後までやり通すことができる」

「わかった。僕、頑張る。頑張るよ」

「ありがとう。ゆうくん。寂しい想いをさせてしまって本当にごめんね」

「お母さん！」

男の子を包み込んでいた光はすうっと消えていった。男の子の顔は涙でぐしゃぐしゃだったが、穏やかな微笑みを浮かべていた。

次の日、男の子はいつもの時間になっても花を買いには来なかった。

「いつもの男の子、今日は学校に行ったみたいだよ」

隣の八百屋の主人が話しかけてきた。

「朝の8時頃にランドセルを背負ってここを通り過ぎていったよ。とても清々しい顔をしてた」

「そうですか……」

男の子に会えなかったのは寂しかったが、良かったと本当に良かったと思った。

次の日の水曜日、店はシャッターが閉まり臨時休業の札がかかっている。

シャッターの前にはバケツが3つ置いてあり、1本100円と書いた紙が張ってある。そして、こう書かれた看板も立てかけてあった。

”どうしてもお花が必要な方はここからお持ちください。お代は箱の中をお願いします”

僕はしばらく帰ってなかった故郷に帰り、母親の墓の前で手を合わせていた。365本もの花はさすがに持っていけなかったが、できる限りの綺麗な花束をもってお墓の花挿しに飾った。その花の中には白いユキヤナギの花と青い花びらのネモフィラの花を入れていった。

僕はかばんの中から1冊の本を取り出した。

「おはながよぶきせき」とその本の表紙には書かれていた。

「会いに来てくれてありがとう」

自分の母親の声が心の中に聞こえてきたような気がした。

雪だるまの奇跡

雪だるまの奇跡

「良太くん、知ってる？ 雪だるまの奇跡のお話」

「知らない。奇跡ってどういうこと？」

「自分で作った雪だるまの頭のほうにねがいごとを書いた紙を入れるとそのねがいがかなうんだって」

「ほんとうに？」

「うん。それでね、天気予報を見たら今日の夜に雪が降るんだって！明日、積もってたら公園で一緒に雪だるまを作ってねがいごとを入れようよ！」

「うん！ そうだね！」

「約束だよ！」

「うん！」

「じゃあ、またね！」

それぞれの家の方向が分かれる交差点で僕はけいちゃんにお別れのあいさつをして、自分の家の方向に歩いて行った。

その時、後ろでドン！という大きな音が聞こえた。

振り返った自分の目に映ったのは信じられない、信じたくない光景だった。

「けいちゃん！ けいちゃん！ 僕、またあの公園で一緒に遊びたいよ。だから、頑張っ
てね！死なないでね！」

病院の廊下に八才の僕の悲痛な声が響く。人の生死なんてまだ完全に理解はできないが、いつも一緒に遊んでいた仲良しで大好きなけいちゃんがいなくなってしまうかもしれない。それはものすごく悲しいことだというのはわかっていた。

二時間たっても、三時間たっても、手術中のライトは消えなかった。

「良太、今日は遅いからもう帰ろう。大丈夫。けいちゃんはきっと大丈夫だよ」

父親の言葉と神様を信じてその日は家に帰った。

その夜、僕はなかなか寝付くことができなかった。もちろんけいちゃんのことを心配だったからだ。

布団から出て、カーテンの隙間から見える外の景色を眺めて見る。その時、目に映ったその光景はとても幻想的なものだった。

大粒の雪がしんと降っていて、街灯の明かりが一粒一粒の雪を照らしている。暗い空から、身をひそめて落ちてきた雪の粒が明かりに照らされて、一瞬の間とても美しく輝き地面に落ちると溶けて消えてゆく。

寒くなってきたので布団の中に戻り、視線を窓の外に向けて、ただただ祈る。

”けいちゃんが助かりますように……”

朝になった。夜に降っていた雪はまだ降り続けている。昨日と同じぐらい寒い日だった。

けいちゃんのことを考えた。助かってほしい。辛い気持ちに耐えられなくなって涙が出てき

てしまった。

「良太、けいこちゃんの所に行くぞ。泣き顔なんか見せたらけいこちゃんに笑われちゃうぞ！」
父親にそう促され、飛び起きて着替えをはじめた。

起きてすぐに父親と一緒にけいこちゃんのいる病院へと向かった。外に出ると地面には十センチぐらいの雪が積もっていた。つぼみが少し膨らみ始めた公園の桜の木の枝にも雪が乗っかっている。桜の木全体が雪の重みに耐えて、必死に頑張っているように見えた。

病院に着いて、父親が受付で尋ねると、けいこちゃんは意識が戻らず、集中治療室で危険な状態が続いてるということだった。

でも事故の内容から考えると即死じゃなかったのが奇跡的なぐらいだったらしい。

「良太、神様におねがいしよう。けいこちゃんが助かりますようにって」

「……神様じゃないよ」

「えっ？」

「おねがいは神様にじゃない！」

そう言うと、僕は病室を飛び出して、玄関へ向かって走っていった。

「あっ！ そうだ。すいません、紙とペンを貸してもらえませんか？」

病院の受付で紙とペンを借りて、ズボンのポケットに押し込んで外に飛び出していった。

雪が積もって、重い地面を必死に走る。五分ほど全力疾走をしてスピードが鈍る。雪は相変わらず降り続けている。

ひと息ついて、またスピードをあげて走り出す。

「けいこちゃん。大丈夫。僕が雪だるまさんをお願いするから」

その時だった。目の前の景色が急激に変化した。視界に映った色は信号機の赤の色から曇り空のグレーの色になりそして真っ黒になった。

五分後、救急車のサイレンの音が微かに聞こえた気がした。

「良太！ 良太！ お母さんとお父さんだよ！ わかる？」

「うん」

「よかった！ 意識が戻った」

「僕、どうなっちゃったの？」

「公園の近くで車にはねられたんだ。赤信号なのに渡って行って。なんであんなことしたんだ？」

「けいこちゃん……。けいこちゃんは助かったの？」

「……」

「何で、何も言わないの？」

「良太、残念だけどけいこちゃんは亡くなったんだ……」

“今日は関東地方に北から寒気が入り込み、昼過ぎからは雪が降るでしょう”

ラジオの天気予報を聞きながら僕は公園のベンチに座っていた。ちらりと時計を見る。時計には三月二十七日、十二時二十五分と表示されている。

何かを期待するように待ち遠しそうに空を見上げる。今にも降り出しそうな曇り空。あの時もこんなどんよりとした空だった。

自分の黒いコートに直径一センチぐらいの白い点ができる。白い点の数はどんどん増えていき、公園の地面もだんだんとまだら模様になっていく。一時間もすると地面はうっすらと白くなった。

二時間経っても三時間経っても僕は公園のベンチから動こうとしなかった。雪はもう五センチぐらい積もっただろうか？

公園の桜の木の枝にも雪が積もりはじめ、徐々に枝がしなだれていく。

やっと、この日に雪だるまを作ることが出来る。あの時に実行できなかった雪だるまへの願い事。

けいこちゃんもういないが、あの時の約束を今日、この日に実行する。それがけいこちゃんへの供養にもなる。そう思った。

コートのポケットから小さな紙切れとペンを取り出す。

「何て書こうか……」

小さな声の独り言は降りしきる雪にすぐに飲み込まれた。その時、携帯電話が鳴った。

「あなた！ 凜が……凜が交通事故で病院に」

「重傷なのよ……。命も危ないって」

「えっ！ 凜が！ わかったすぐにそっちに向かう」

病院の廊下には長椅子に座って憔悴しきった妻の姿があった。

「凜は？ 凜はどうなんだ！」

集中治療室の前で夫の問いかけに答えることができない妻の様子が全てを物語っていた。

少しして、妻がつぶやいた。

「明日には雪が積もってそうだから、公園で友達と雪だるまを作るんだって楽しみにしていたのに……」

なんていうことだ。あの時のけいこちゃんの時と同じ状況じゃないか。しかも、今日という日に今度は自分の娘がこんなことになるなんて。人生はなんて皮肉なんだ。

僕の脳裏に二十七年前のあの時の出来事がふたたびよみがえってきた。

「雪だるま……」

そうつぶやくと、あの時と同じように僕は病院の玄関に向かって走り出した。

「あなた！ どこに行くの！？」

雪が積もって重い地面を必死に走る。大人になった今では、子供のころのあの時より当然速く走ることができる。

この信号を渡れば公園だ。二十七年前、車にはねられてたどり着けなかった。今度はあの時とは違う。

信号を渡って、公園に入る。公園の中央にはすでに身の丈一メートルぐらいの雪だるまが座っていた。にっこりと笑顔を浮かべているように見えた。

雪だるまに近づくと、頭の後ろの部分に筒状の穴が開いていた。ここに何か入れてください

と言っているようだった。

誰がこんな雪だるまを作ったのだろう……。不思議に思ったが何か運命のようなものを感じた。

さっき、一度ポケットにしまった紙とペンを再び取り出す。文字を書こうと思うが、手がかじかんでなかなかまともに書けない。震えるような字で”凧が助かりますように”と書いて雪だるまの頭に押し込む。その後地面にある雪を拾って筒状の部分に詰めて空洞を完全にふさいだ。

しばらくその場に佇んで、雪だるまに向かって両手を合わせ祈る。そして病院に戻った。

朝になった。扉の開く音。医者が集中治療室からでてきた。

「娘さんは、凧ちゃんは大丈夫です。奇跡的に命を取り留めました。よかったですね！ お父さん！ お母さん！」

二人の顔には喜びの笑顔と同時に涙が零れ落ちていた。よかった……。よかった……。

「雪だるまの願い事、叶ったみたいだ」

「えっ？何？雪だるまの願い事って？」

ぼそと言った僕の一言に妻が反応した。

「いや、なんでもないよ」

一週間後、春らしい陽気となりあの時に積もった雪はすっかり解けてなくなっていた。

凧のいる病院へと向かう途中、何気なく公園を見ると真ん中のあたり、雪だるまが座っていた場所に小さな紙切れが落ちていた。

願いをかなえてくれた感謝の気持ちでその紙切れを拾い、広げてみる。

そこには一一、自分が書いた文字の他にもう一行、願い事が書かれていた。

“良太君の願いが叶いますように”

これは……。

二十七年前、けいこちゃんとした”一緒に願い事を入れよう”という約束は時を超えて果たされたのだった。

「あっ、雨だ。どうしよう、傘持ってこなかった」

今日はおばあちゃんの誕生日。女の子はおめでとうのメッセージカードと手作りのひざ掛けをプレゼントで持っていくところでした。女の子の名前はメルバといいます。

プレゼントが濡れないように胸に抱えて、メルバは急ぎ足でおばあちゃんの家を目指しました。

そこへある男の子がやってきて、メルバに話しかけてきました。

「傘持ってないの？」

「うん」

「じゃあ、この傘を貸してあげる」

「いいの？」

「うん、後で返してね」

「ありがとう！必ず返すから」

男の子は去っていきました。

よかった。これでプレゼントが濡れなくて済む。メルバは安心しました。ところがその男の子が貸してくれた傘をさすと、やがて傘に穴があいて雨が漏れてきました。

よく見るとその傘は紙でできていたのです。見る見るうちに紙の傘は水に濡れて破れてしまい使い物にならなくなってしまいました。

そこへさっきの男の子が現れました。

「あっ！ 僕の傘、壊したな！」

「えっ、だってこの傘、紙でできてたじゃない。水に濡れたら、破れるにきまつてるよ」

「知らないよ。弁償しろ！」

「えっ、ひどいよ。そんな。お金なんて持ってないし」

「じゃあ、その胸についている銀のバッチでいいよ」

「これはおばあちゃんからもらった大事なバッチなの」

「うるさい！ このバッチはもらっていくよ」

男の子はメルバの胸から無理やりバッチを取って去っていきました。

「ひどいよ……」

でも、落ち込んではいられません。早くおばあちゃんにプレゼントを届けなくては雨はまだ降り続いています。

そして急ぎ足で歩き出すとまた、メルバに話しかけてくる男の子がいました。さっきとは違う男の子です。

「傘持ってないの？ よかったら、この傘を貸してあげる」

メルバはちょっと疑いましたが今度の傘は紙の傘ではないようです。

「借りてもいいの？」

「うん、いいよ」

「ありがとう」

二人目の男の子は走り去っていきました。

今度こそ、助かった。メルバはその傘をさして歩き出しました。

「あれ？」

でも、二人目の男の子に借りた傘も何かおかしいのです。

傘からは茶色い水がたれてきました。そしてところどころ傘の生地が崩れてきています。その傘は土を固めてできていたものだったです。傘は見る見るうちに崩れて壊れてしまいました。メルバの身体は泥水で汚れて大事なプレゼントも汚れてしまいました。

そこへ傘を貸してくれた二人目の男の子が現れました

「ばーか！ 土でできているのわからなかったのか」

その男の子はメルバの惨めな姿をみて腹を抱えて笑いました。そして、その場を去っていきました。メルバは悲しくなってその場で立ち尽くし泣き出してしまいました。

そこへ、また違う男の子が現れました。

「どうしたの、そんなにずぶぬれで泥だらけになって？ 傘持ってないの？ 僕のを貸してあげようか？」

「もう、信じられない」

「どういうこと？」

「今まで、私に二人の男の子が傘を貸してくれたんだけど、二人ともひどい人だったの。ニセモノの傘を渡されて……」

メルバは三人目の男の子にいきさつを話しました。

「そうか、じゃあ僕は君をそのおばあちゃんの家まで送ってあげる。一緒に傘をさして歩くから大丈夫」

「ほんとう？」

「うん。僕の名前はアベル。よろしくね」

その声は今までの男の子とは違い、とても優しく聞こえました。そしてメルバは三人目の男の子、アベルと一緒に歩き出しました。

「どこまで行くの？」

「おばあちゃんの家をプレゼントを届けに行くの。でも、プレゼントのふくろも汚れちゃった。それにこんな格好じゃおばあちゃんに会いにいけないよ」

「ちょっと、待ってて。えい！」

アベルが声を上げると、見る間にメルバの服が綺麗になりプレゼントのふくろも元の通り綺麗になりました。

「わあ、すごい！ ありがとう」

「これでおばあちゃんに会いにいけるね」

「あっ、今アベルのおでこに星の形が見えたよ。それはなに？」

「これは……なんでもないよ、気のせいじゃない？」

「そう……」

メルバは不思議に思いましたが、気にしないことにしました。今はそれどころではありません。そしてアベルと一緒におばあちゃんの家に向かって歩き出しました。橋を渡って川を越え、あと五分ぐらいでおばあちゃんの家というところまで来ました。ところが突然、メルバはおなかをかかえてうずくまってしまいました。

「どうしたの？」

「おなかがいたい。くるしい」

「雨にぬれて身体が冷えちゃったのかな？ちょっと待ってて、えい！」

「……」

「どう？ 治った？」

「おなかがいたい」

「ダメか」

「じゃあ僕が薬草を取ってきてあげる。ここで待っててくれる？」

「うん」

アベルは薬草の生えている丘のほうに走っていきました。アベルがいなくなり一人で待っていると、またしてもメルバに話しかけてくる男の子が現れました。

「苦しそうだけど、どうしたの？」

「おなかが痛い」

「僕、薬を持ってるよ」

「でも今、薬草を取りに行ってくれてる人がいるの」

「じゃあ、いらない？」

「うん、その人を待ってみる」

「チェッ！せっかく助けてやろうと声をかけてやったのに」

(ちくしょう、格好の獲物だと思ったのにだませなかったか)

四人目の男の子は去っていきました。

メルバはおなかがいたいのを我慢しながら、ただ薬草を取りに行ったアベルを待っていました。大丈夫、きっと戻ってきてくれる。メルバは信じていました。そして、しばらくして薬草をもってアベルは帰ってきました。

「遅くなってごめんね。これを食べれば大丈夫だから」

「ありがとう」

薬草を食べるとおなかの痛みは嘘のようになりました。

「よし！じゃあ、行こう。」

そして再び歩き出した時です。見覚えのある男の子が傘を持っていない女の子に話しかけているのを見かけました。

「あっ、あの男の子、私に紙の傘を渡してバッチを取って行った男の子だ。今度は違う女の子をだまそうとしている」

その男の子は胸にメルバの銀のバッチをつけています。

「ねえ、このままじゃあの女の子も騙されてしまう。あの子を助けてあげて」

「僕が行ってもかまわないけど。メルバが行った方がいいんじゃないかな」

「でも、怖いよ」

「自分と同じような目にあわせたくないんだろう？ それに自分のものは自分で取り返さないと。何かあったら僕が助けるから」

「わかった。じゃあ行ってくる」

メルバは勇気を出して、その場に近づいて行き、こう言いました。

「ダメだよ！ その傘は紙でできているから、すぐに破れちゃうよ。だまされないで」

メルバは傘を持っていない女の子に叫びました。

すると、紙の傘を持っている男の子はメルバをにらんで言いました。

「いいかげんなことを言うな！ お前なんかこうしてやる！」

男の子はメルバをたたこうとしました。

その時です。空から突然、雷が落ちてきました。雷は男の子の胸についている銀のバッチめがけて一直線に落ちてきました。

「ぎゃあ————」

紙の傘でメルバをだました男の子は黒焦げになって、「こんなバッチはいらないよ。返す！」と言ってメルバに銀のバッチを投げました。

「よかった。わたしの銀のバッチ戻ってきた！ アベル、この傘女の子に貸してあげてもいい？」

「うん、いいよ。それならもう一つ傘を出すね。えい！」

アベルが魔法を唱えると新しい傘が出てきました。

「ありがとう！ 必ず返すから」

女の子はアベルが出した傘を持って去っていきました。

そして二人は歩き出しました。すると今度はメルバに土の傘を渡した男の子が傘を持っていない女の子に話しかけています。

「あっ、今度はあの男の子だ！」

メルバはさっきと同じように傘を持っていない女の子にこの男の子は悪い奴だということを伝えました。

それを聞いて、土の傘をもった男の子は怒ってメルバに向かってきました。メルバは思わず目をつむり、体に強く力を入れました。

すると、突然メルバの目の前に落とし穴が現れて、こちらに走ってきた土の傘を渡した男の子は落とし穴に落ちてしまいました。

「わあ————！！」

男の子は穴に落ちて泥だらけになってしまいました。

「わあー、ごめんよお。助けてよお」

「あなたが悪いんでしょう。しばらくそこで頭をひやしなさい！」

メルバは強い言葉で穴の下の男の子に叫びました。

「アベル、この女の子にも傘を出してあげて」

アベルはえい！と魔法を唱え新しい傘を女の子に渡してあげました。

「ありがとう！ 必ず、返すから」

女の子はアベルの出した傘をもって去っていきました。

そして、ついにおばあちゃん家に着きました。アベルとはここでお別れです。

「アベル、ほんとうにありがとう！ アベルがいなかったら、わたし、おばあちゃんの家までたどり着けなかった」

「よかったね。さあ、おばあちゃんにプレゼントを渡してきなよ。じゃあ、僕は自分の家に帰るね」

「また、わたしが困ったときは助けてくれる？」

「メルバが本当に困った時はそばに行くよ。でもね、メルバは自分一人でも立ち向かっていける。メルバにはもうその力があるんだよ」

「どういうこと？」

「……」アベルはその質問には答えずになっこり笑って去っていきました。

コンコン。そしてメルバはおばあちゃん家のドアをノックしました。

「まあメルバ、元気だったかい？ 来てくれてありがとうとっても嬉しいよ」

「おばあちゃん、誕生日おめでとう！」

「まあ、ありがとう。メルバ、ここまで来るのにとっても大変だっただろう。でも、今日一日でメルバは三つの心と大きな力を手に入れたんだよ」

「三つの心？ 大きな力？ それになんで、私が大変だったことがわかるの？」

「おばあちゃんはメルバのことは何でもわかるんだよ」

「えい！」

その時、メルバはアベルの小さな声を聞いたような気がしました。おばあちゃんはたんすの上の鏡を見てほほえみんでいます。そこには雷に打たれて黒こげになった男の子がもとどおりのきれいな格好で微笑み、落とし穴に落ちた男の子もきれいな格好になって、穴の外に出ている姿が写っていました。

「さあ、もういいからお入りなさい」

メルバはおばあちゃんの家に入るとすぐに疲れて眠ってしまいました。すると、すやすやと眠るメルバのおでこに一瞬、星形の模様が浮き出て光りました。そしてだんだん薄くなってその模様は見えなくなりました。

メルバは試験に合格したのです。

一番綺麗なひまわり

ある時、お金持ちの主人が下働きの2人の女性、メルバとナージャにこんな命令をしました。
”ここから少し離れたところにひまわり畑があるだろう。わたしはあのひまわり畑で一番綺麗なひまわりが見たい。それぞれ、一番綺麗だと思うひまわりをわたしに見せてくれ。良い方には褒美を与えよう”

ひまわり畑にやってきたメルバとナージャ。

「あの奥に咲いているのが一番綺麗だわ！あれにしましょう！」

メルバは夢中になって、手前にあるひまわりを掻き分けて、目当てのひまわりを手にした。確かにそのひまわりは黄色い花びらをたくさんつけて、内側の円形の部分とのバランスも良く色も鮮やかでした。

一方、ナージャはというと畑の手前で立ちすくんで一向に花を取りに行こうとしません。元気に生き生きと、そして優雅に咲いているひまわりたちをただ鑑賞しているようでした。

やったわ、ナージャはやる気がないみたい。これはわたしの勝ちね！意気揚々とメルバは自分がとったひまわりを手にして先にお邸に戻りました。

「ご主人様！わたくしがあの畑で一番、綺麗なひまわりを取ってきました」

「メルバよ、このひまわりが一番綺麗だと言うのか？ わたしにはこのひまわりは悲しげに首をもたげているように見えるが」

確かにメルバが持ってきたひまわりは畑で咲いている時とは違い元気がなく、しおれてきている感じすらします。

そして、その後ナージャがお邸に戻ってきました。

「ご主人様、わたくしもあの畑で一番綺麗だと思うひまわりを持ってきました」

しかし、その手にはひまわりの花ではなくスケッチブックが握られています。

「これを見てください」

そこにはたくさんのひまわりの絵が書いてあり、そのどれもが太陽の光を浴びて輝き、とても美しく描かれていました。

「わたしも最初はメルバと同じように奥のほうに咲いているとても綺麗なひまわりを見つけました。でも、そのひまわりを取るには手前にある他のひまわりをなぎ倒していかないといけません。それにこの畑に咲いていればあのひまわりはもっともっと綺麗に咲いていられる。なので、花は摘み取らずに絵にすることにしました。」

主人はやさしく微笑んでナージャの絵を手に取り、この絵はわたしが買おう。と言って100万ドルをナージャにわたしました。

最後の日

最後に桜を見たいと思った。穏やかな春の夜にかけがえのない思い出のある、あの場所で――

※

毎日が全く面白くなかった。仕事をしていても、休みの日を過ごしていても、酒を飲んでみても、心が踊るようなことは何一つなかった。

三十八歳独身。生命保険会社勤務。役職は主任。年収七百万。この御時世を考えれば、僕は充分なステータスをもっていた。

でも、僕は孤独だった。中学二年の時、ある日突然、母が何の予告もなく家を出て行った。理由は職場の上司との不倫。その上司が大阪に転勤になったのを機に仕事を辞め、背中を追いかけて大阪に行き、水商売をしながら単身赴任となったその上司のマンションに足繁く通っていたらしいのだ。

真面目で優しくて穏やかな性格の父は母の不貞に全く気付かず、突然いなくなった母のことを何かあったのではないかと心配し自分が裏切られ愛想を尽かされたなどとは全く想像しなかった。

母の安否と行方を知る為に探偵事務所に依頼をした。それで始めて真実を知った父は愕然とし、魂を抜かれたようにうつろな目で下を向いた。

次の日、僕が学校から帰ると玄関に仕事に出かけたはずの父の革靴がきれいにそろえて置いてあった。不思議に思い、居間に入ると……そこには変わり果てた顔をした父の体が宙に浮いていた。

外は桜が満開で、人々が花見の席で談笑し、暖かい春を穏やかな日差しを心地よい空気を感じている。でも、帰ってきた我が家はまるで、自分の家の上にだけ黒い雲が乗っかり、雷が落ち、激しい雨が降っているような、そんな感じがした。

僕はその時に思った。優しい人間は不幸になり生きる望みを失くし、欲望の赴くまま平気で裏切る人間がのうのうと生きてゆくのだと。

その時から、僕は女性を信じられなくなった。中学三年の一年間、高校生活、大学生活、そして社会人になっても、僕は恋人などおらず、一人きりだった。

両親を失った僕は父の弟にあたる親戚のおじさんに引き取られた。おじさん夫婦も僕が高校を卒業した時に離婚してしまった。その理由については興味がなかったのでよくわからないが、どうやら父の家系は幸せな結婚生活を送ることができない因縁があるようだった。

つまりは父の血を引いている僕も誰かを愛しても、きっと結婚は失敗する。それならば、恋愛もしない方が良く、誰ともかかわらない方が良く、そう思ってこの歳まで孤独を貫き通してきた。

ただ、過去にたった一人だけ……、心を奪われそうになった女性がいた。その人を好きになってしまいそうになった。

田中里美さん――。大学生の時のバイト先の仲間だった女性だ。その当時、彼女は二十九歳。

僕と彼女は有楽町の駅前に新しく建設されたオフィスビルの中にあるカフェでバイトをしていた。僕は厨房でカフェのメニューの担当。オーストリアのウィーンの喫茶店からレシピを取り寄せたというその喫茶店のコーヒーやパフェはどれも本格的で、厨房での調理はコーヒーをカップに注ぐだけとか、ガラスの器にアイスや生クリームをただ積み重ねるといような簡単なものではなかった。

お客様に提供する形も銀製のトレーに見栄えが良いようにぴったりと配置が決まっており、デッシャーと呼ばれるセットする担当も速さと見栄えの両方のクオリティを保たなくてはならず、なかなかのスキルが必要とされる仕事だった。

彼女はそのデッシャーを担当することが多かった。彼女が一番、仕事をこなすことができたからだ。厨房とデッシャーの連携はとても重要で厨房側からは、次にどの商品が出るのかをデッシャーに伝え、デッシャーはそれに応じて迅速にセットをする。

僕と彼女の連携は息がぴったりで、彼女と組む時はどんなに忙しくてもスムーズに注文が通り、お客様にもそれほど待たせることなく提供ができた。

厨房から商品を出すときに幾度となく彼女と目が合った。そこには僕が否定しつづけた信頼があるような気がした。目が合ったときに時折見せる彼女の笑顔に心を揺さぶられることもあった。

三月の下旬のある日。桜の蕾も膨らみ始めて、もうすぐ春という時季に季節外れの寒波がやってきた。早朝から雪が降り東京都心も積雪を記録した。午前九時には十センチの積雪となり、電車は運転見合わせや遅れが相次いだ。その日に出勤するはずの従業員も足止めを食らい、まともに出勤できたのは僕と田中さんだけ。店長も開店の十分前になっても到着していない。

あわてて店長の携帯電話に連絡を試みる。

「店長、大谷です。今、どこにいらっしゃいますか？」

「ごめん、電車が動いていないのでタクシーでそっちに向かっている。でも、道路も渋滞していて車がなかなか進まないんだ」

「僕、鍵とかもってないのでお店開けられないですけど、どうしますか？」

「ビルの管理室に行って、事情を話せば鍵を渡してくれるはずだから、大谷君が店を開けてくれるかな？ ほかに出勤しているスタッフはいないの？」

「あとは田中さんだけです」

「そうか、君と田中さんなら二人でも大丈夫そうだ。俺が行くまで、なんとか二人で頑張ってくれ」

「わかりました。やってみます」

何とかいつもの時間に開店し、普段と同じようにお客様を迎える準備をするが、その日は日曜日で会社が休みということもあり、お客様は全く来ず開店休業のような状態だった。僕は厨房から出てホールで田中さんと外の様子を見ていた。

向かい側の建物は全面ガラス張りの多目的ホールになっている。その建物との間への通りは普段ならば多くの人が行き交い、ランチのお弁当などを販売するワゴン車が多く留まり、開店の準備

をしているはずだった。しかし、さすがに今日は歩く人などほとんどおらず、弁当販売のワゴン車も一台も来ていなかった。

チャコールグレイのアスファルトは雪が積もって真っ白になり、通りのあちらこちらに植えてある街路樹の枝には、うっすらと雪がまとわりついている。いつもは都会的な冷たい印象のモノクロの世界が今日は温かみのある水墨画のように見えた。

「綺麗……、雪って本当に綺麗だね」

彼女の声はとても綺麗だった。綺麗？ いや、なんだろう。なんて形容したらいいかわからない。ただそれは心にじんわり沁み込んで、何とも言えない心地よさがあった

「私、沖縄の出身だから雪ってほとんど見たことないの」

「田中さん、沖縄だったんですか」

彼女が時折見せるおおらかな笑顔は沖縄で育った賜物なのだろうか。

「雪、あの日以来だな……」

そうつぶやいた彼女の表情を見ると、大きく見開いた眼には薄い膜ができ、ほんの少しの厚みを帯びているような気がした。そこから一滴の水が流れ、薄い膜は壊れ、その厚みは消えた。

「……」

僕は彼女の顔から眼をそらした。そのまま見てしまうと、自分の心に変化がおきてしまうのではないかと思った。今まで自分が頑なに閉ざしてきたものに変化が起きたとしたら、それは良いことなのだろうか、それとも悪いことなのだろうか。

それでも僕は彼女を見つめたいという衝動に駆られ、店のガラス窓に映る、外の真っ白な光景に視線を落とす彼女の顔を窺った。そこに映った彼女の顔はあまりに美しくて現実のものとは思えなかった。

「大谷君、今日仕事終わった後、時間ある？」

外に向けた視線を動かさずに彼女が言った。

「はい」

「一緒に食事でも行かない？」

「はい」

いつもなら人からの誘いは断るのだけれど、僕はあっさりと返事をしてしまった。女性を信じられない。それなのに彼女だけは何か違った。仕事での信頼関係からくるものなのか、それとも……。

開店から一時間が経ち、ようやく店長とほかのスタッフも出勤してきた。お昼ごろには雪は止み、電車が動き出すとまばらではあるがお客さんも来るようになった。いつもは戦場のような厨房も今日だけはゆったりとした時間が流れていた。

オーダーが入っても、それほど急ぐ必要がないので注文が入ったヴィーナリーベと呼ばれるパフェをとにかく形よく、美しく作ることに専念してみる。アイスクリームをパフェグラスの上に置き、キウイ、アプリコット、オレンジなどのフルーツを乗せ、指先を集中し、生クリームを絞る。最後にキウイソースとロールクッキーを乗せて完成させた。

なかなかの出来栄えだった。僕は満足気にそのパフェを眺めた後、デッシャーの彼女へ渡した

。彼女はにっこりと微笑み「美味しそう」と言った。

僕は何故か、その時の彼女の笑顔が、心に焼き付いて離れなかった。

十八時になった。僕も彼女も上がりの時間だ。

「お疲れ様でした」店長に挨拶をすると「ご苦労様、今日は店を開けてくれてありがとう。助かったよ」と店長は笑みを浮かべて僕ら二人を見た。

お互い更衣室で私服に着替えて、ビルの一階で落ち合い、有楽町の駅の方に歩いて行った。彼女は何も言わず、まっすぐに前を見つめ歩いて行く。歩道は雪が少し解けて、ぐちゃぐちゃになっているが、そんなことは何も気にせず早歩きで彼女は進んでいった。

有楽町の駅を抜けて、銀座方面に出る。晴海通り沿いの歩道を歩き、四丁目の交差点までやってきた。

上空を見上げると、和光の時計台が見えた。その針がさしているその時間はもう、二度とやってこないもので、そう考えると今見えているすべてのものが、かけがえのないもののように思えてきた。後ろから見る彼女の背中もまた、とてもいとおしく思えるような……。なんだか不思議な感覚だった。

交差点を左に曲がり、二つめの角を左に入った。細い道を五十メートルほど歩いて彼女は立ち止った。

「ここでいい？」

地下に続く、狭い階段があり“朧月”という看板が掲げてある。和食のお店だろうか？「はい、いいですよ」

僕がそう答えると彼女は階段を下りて行った。僕はその後に続く。彼女が階段を降り切って左側の引き戸を開けると、いらっしゃいませという穏やかで温かい声が聞こえてきた。

彼女の顔を見た和服を着た女性の店員は常連のお客様を迎えるような、安心した笑顔を浮かべた。そしてその後、僕にも穏やかな笑顔を向けた。

四人掛けのテーブル席が五席、カウンター席が六席のこじんまりとした、落ち着いたのある店だった。彼女は一番奥のテーブル席に座り、コートを脱いで、壁のハンガーにかけた。僕は向かい側の席に座り同じようにコートを脱ぐ。彼女は僕のコートを手に取りハンガーにかけてくれた。

彼女にしてもらった何でもないことが、とても新鮮でいちいち心に響いてくる。今日の僕は何かおかしい。僕は彼女を、田中さんを女性として強く意識していた。

「何か嫌いなものとかある？」

「いや、大丈夫です」

「じゃあ、おまかせで二人分お願いします」

彼女は笑顔で和服の店員さんに注文を告げた。

「どうしたの？　なんだか緊張しているみたい」

やさしい笑顔で彼女が僕に向けて微笑む。

「いや、あんまりこういうお店には来たことないので……」

「そうだね。大学生だから彼女と食事だとイタリアンとかそういうお店に行くのかな？」

「彼女はいないです」

「本当？ 大谷君、すごくもてそうなのに」

「いや、僕なんかぜんぜんもてないです。それに……」

「それに？」

「いや、なんでもありません」

「会話の最初に“いや”ってつけるのは口癖？」

彼女はまた微笑んだ

「あっ、そうなんですかね、気づかなかったです」

「お酒は飲む？」

「あっ、はい。じゃあ僕はビールで」

「わたしは日本酒にしようかな」

そういうと彼女はビールと日本酒を注文した。

前菜がテーブルに運ばれてきた。

「これはなんですか？」

「タケノコの木の子の芽和え。食べたことない？」

「はい、はじめてです」

ちいさな山のように盛られたタケノコの上に鮮やかな緑の飾りの木の子の芽が乗っかっている。タケノコを一口に入れる。白みその甘みとだしの香りが口の中に広がる。少しだけ、緊張が解けたような気がした。

「あのね、わたし、なんか不思議なの」

「はい？」

「大谷君のこと」

「……」

「八歳も年下なのにね、すごく頼りがいがあるっていうか、安心感があるっていうか。仕事でよく一緒に組むでしょ。厨房とデッシャーで。大谷君と組む時は本当に安心なの。絶対に失敗とかしなさそうって。大谷君が休みでほかの人と組む時は実はあんまり仕事がスムーズにいったいのよ。知らなかったでしょう」

確かに自分が休みの日のことは知らなかった。ただ、もう一人いるカフェの担当のバイトも自分と同じぐらい仕事のできる人間だと思っていた。なので、きつとうまく仕事をこなしているのだろうと思った。

「それでね、わたし、大谷君のこともっと知りたいなあって思ったの」

彼女は恥ずかしそうに少しうつむき、再び顔をあげて、僕の目を見た。

「……」

僕は何もしゃべれずにいた。なんて言っているかわからなかった。彼女は僕に好意をもっているのだろうか？ 恋人がいない男が彼女のような綺麗な人からこんなことを言われたら、素直にうれしく思い期待する。それが普通だろう。

でも、僕は普通ではない。やはり信じられない。今までずっとそうだった。ただ、彼女の言

葉には彼女の笑顔には彼女の目には、今までの女性とは違う何かを感じていた。僕の心は混乱していた。綱引きのロープの真ん中についている赤いマーキングが中央のラインを行ったり来たりするように、彼女の魅力と僕のトラウマが力比べをしていた。

「僕も、田中さんと仕事で組む時はとても安心感があります」

彼女は僕の返答に少し不満な様子だ。

「女性としてはどう思う？ わたしのこと」

彼女はこう言うと、僕の目を見つめた。

「……」

綺麗な人だと思う。でも、積極的な彼女に対しての疑念もある。でも、心が吸い寄せられそうになる。

「僕、今まで一度も女性と付き合ったことがないんです。僕は女性を信じられないんです」

僕は無意識のうちに口を開いてしまった。心の扉が開いた訳ではないが、窓に穴が開いてそこから本音が漏れてしまったようだった。僕はさらに続けた。

「母が父を裏切って、父は自殺しました。父は真面目で優しくて誠実な人間でした。母のことも本気で愛していたはずです。でも、母は十三年間、夫婦として人生を共にしてきた父をあっさり、いとも簡単に裏切りました。なので、僕は……女性を信じられないんです」

思わず、話してしまった。重いよな。こんなことを自分から誰かに話したのは初めてだった。

「……そう、悲しい思いをしたんだね」

彼女は眉間に少ししわを寄せ悲しそうな表情をした。その後、わずかな沈黙が流れた。

「わたしもね、裏切られたんだ、好きな人に……もう三年前のことなんだけど、話聞いてくれる？」

僕は黙って頷いた。

「遠距離になってしまったの、その時付き合っていた彼とは。幼馴染で二歳年上でね。小さいころは沖縄の海で一緒によく遊んだりした。とても頭が良くて行動力があって、頼りがいのある人だった。高校生の時から十年間付き合った人で本当に大好きだった。このままこの人と結婚できたらいいなあって、付き合い始めたときからずっと思っていた」

カチャ。小さな音がした。彼女が飲んでるグラスの氷が動いた音だった。彼女は少しの間をおいて、再び話し始めた。

「よくあるパターンなんだけどね。遠距離になって、初めのころは彼もよく電話をくれたの。東京ってこんなに寒いんだな。甘く見ていたよ。会社がある新橋はさあ、すごくたくさんの方がいて。……なんて本当にありきたりの会話をして、それでもそんな会話ができることがすごくうれしくて、うれしくて、たまらなかった。でも、だんだん連絡が来なくなったの。こっちから電話しても呼び出し音が繰り返し鳴るだけで、電話から聞こえるのは彼の声ではなくて、留守電の機械的な女性の声ばかりで……それでね、わたし彼に内緒で東京まで行ったの。とても寒い雪が降っている日だった。彼の住んでいるマンションに何も言わずにいきなり行って、もちろん日曜日に」

苦笑いを浮かべて、彼女は下を向いた。そして顔をあげ、続きはもうわかるでしょう？ という

ような笑みを浮かべて、彼女はまた話し始めた。

「彼の部屋の前に着いて、インターホンを押して、祈るような気持ちだった。でも、彼は部屋にはいなかった。留守だったことが残念なような、ほっとしたようなそんな気持ちだった。出直そうとして歩き出して、下におりるエレベーターを待っていた。二十秒後にエレベーターが着いた。そこには半年ぶりに見た彼の顔があった。そして、その横には初めて見る女性の顔があった。二人は腕を組んでいた。手にはコンビニの袋をぶら下げていた。彼の大好きなレモンティーが半透明の袋に透けて見えていた。わたしはその時、彼に何も言えなかった。恐れていたことが、予想していたことが的中して……何も言わずに、二人の横をすり抜けてエレベーターに乗った。彼もわたしに何も言ってこなかった。わかってはいたのだけれど、いきなり押し掛けたりするべきじゃなかった。そのことを後悔したけど、それをしなければ、その後にもっと大きな後悔をすと思った。あの時にわかってまだよかったのかもしれない。マンションからの帰り道、駅まで歩く途中に小さな公園があつてね。地面も木もベンチも滑り台もブランコも、すべて雪で白くなっていて、とてもきれいだった。でも、でもね、その白さがとても虚しくて、とても寂しかった。たった半年、半年でわたしと彼との十年間は終わってしまった。離れてしまった半年が重かったのか、一緒にいた十年が軽かったのかはわからない。でも、軽かったとは思いたくなかった」

「……」

彼女はまるで恋愛小説の一部分を朗読しているかのようだった。僕は何も言えなかった。何か言うべきだと思った。でも、何も言えなかった。彼女は初めからこういう話をするつもりだったのだろうか。僕の過去の話聞いて、思わず吐き出してしまったのだろうか。

「鱈の柚子風味焼きでございます」焼き物の鱈がテーブルに運ばれてきた。

重くなった雰囲気のところ爽やかな柚子の香りが漂い、重い空気が少しだけ晴れたような気がした。

「話題、変えようか。大谷君は好きな芸人さんとかいる？」

「えっ？」

突拍子もなく、彼女は他愛もない会話を始めた。それから僕らは職場の同僚のことや店長のこと、常連のお客さんのことなど、さっきまでの会話は忘れてしまったかのように取り留めのない会話を続け、食事は終りを迎えた。

店を出て、階段を上がる。通りに出ると、入った時には気づかなかったが、向かい側にちいさな公園があった。そこには一本の大きな桜の木があり、枝に積もった雪の隙間からほんの少し膨らんだ蕾が見えた。

彼女は公園の桜の木をじっと見つめていた。僕もその桜の木をじっと見つめた。いや、魅入られてしまったのかもしれない。

「桜って、花が咲き始めて満開になるとみんな綺麗、綺麗って喜ぶでしょう。でもね、わたしは咲き始める前の、蕾が膨らんだぐらいの桜が一番好きなの。これからっていう希望に満ちているっていうか。満開になってしまったら、後は散ってしまうだけだから……」

「僕は……僕がもし植物だったとしたら、一生花を咲かせることはないと思います」

「大谷君が自分から水と光を求めるようになれば、きっと花は咲くと思う」

彼女はそう言った。僕にとっての水は、光は、彼女なのだろうか。少なくとも今の僕には彼女以外の女性の存在は考えられなかった。

彼女は僕の方に視線を向けた。そして、僕の方に体の向きを変えた。まっすぐに僕を見つめるその視線から見えない鍵が現れて、僕の心の扉の鍵穴にまっすぐに突き刺さった。あとはその鍵を右に回せば、カチャリと音を立てて、それは外れてしまうのではないかと、そう思った。

次の日、出勤のはずの彼女の姿が見えなかった。

「店長、今日は田中さん、どうしました？」

「体調が悪いから休ませてほしいって、電話があった。めずらしいよな」

どうしたのだろうか？ 普通に風邪か何かひいたのだろうか？ 昨日、一緒にいた時は具合が悪そうには見えなかったけど。心が疼いた。僕と食事をしたことが何か関係しているのだろうか？

いや、それは自意識過剰だろう。おかしい、今まではこんな風に思ったことは一度もないのに。

その日は一日、仕事に身が入らなかった。昨日のことが、頭の中で心の中でいっばいで、彼女の笑顔が寂しそうな顔が浮かぶばかりだった。

今日は平日なので、バイトのあとには大学の授業が入っていた。僕は夜間の大学に通っている。でも、今日は授業に出る気にはならなかった。バイトを終えて、店を出た後、銀座方面へと歩いた。昨日、彼女に連れて行ってもらった店へもう一度、行ってみたくなった。いや、その店に行きたかったというよりは昨日と同じように、彼女と一緒に歩いた道を歩きたくなったのだ。

四丁目の交差点を曲がり、二本目の角を左に曲がり、細い路地に入る。右手に昨日、店を出た後に立ち止った公園が見えてきた。その公園のベンチに一人の女性が座っていた。田中さんだった。彼女は僕に気づき、穏やかに微笑んだ。僕は彼女のほうに近づいて行った。

「今日は学校の授業はサボリ？」

「はい、ちょっと今日は……」

「わたしも今日は仕事サボっちゃった」

「どうしてですか？」

「昨夜、いろいろと思い出しちゃって……眠れなかったの。とても仕事に行ける状態ではなかった。バイトとはいえ、こんなことしたらダメだよな」

昨日、積もった雪は一日でだいぶ無くなっていて、枝にまとわりついていた雪はすべて消えていた。

彼女はベンチから立ち上がった。僕の顔をまっすぐに見つめ、一歩、二歩と僕の方に近づいてきた。そして何も言わずに僕の胸に顔を押し付け、僕の背中に手をまわした。

彼女が感じた僕の心の温度は温かかったのだろうか、それとも冷たかったのだろうか。

僕自身も自分の心の温度がわからなかった。僕も自分の手を彼女の背中に回した。僕は今、一人の女性を抱きしめている。生まれて初めてのことだった。普通ならこの上ない幸せを感じるのだろう。でも、僕はそれがわからなかった。

「そっか」

少しの沈黙の後、彼女はそういと僕から離れた。

「じゃあね」

少し微笑んで、寂しそうな顔をして、彼女は立ち去っていった。

それが彼女と交わした最後の会話だった。次の日、彼女はまた出勤しなかった。突然、今日で仕事を辞めますとの電話があったそうだ。彼女は僕のことをどう思っていたのだろうか。辞めた原因は僕なのだろうか。僕は彼女の気持ちに答えられなかったのだろうか。僕は彼女のことが好きだったのだろうか？ なぜだか、罪悪感が心の中に広がった。

夢が覚めたみたいだった。良い夢だったのか、いやただの幻だったのか。でも、少なくとも僕は彼女に出会えてよかったと思った。心の扉は開けなかったけど、初めて扉をノックしてくれた人に出会えた。ノックされたその振動が僕の心の奥に温かいものを運んでくれたそんな感じがした――

あの場所に十七年ぶりに行ったのは四月一日、桜の蕾が膨らんで今にも花が咲きそうなそんな時だった。銀座四丁目で酒屋をやっている坂上さんというお客様。保険の満期が近づいてきたのでご挨拶に伺ったのだ。住所を見たときに、ピンときた。あの時のあの場所の近くだと。

支社のある品川駅から山手線に乗り、有楽町駅で降りる。有楽町マリオンの通りを抜け、晴海通りに入る。まずは四丁目の交差点に向かって歩き出した。昼間は四月下旬の暖かさだった今日の日も、夜になると少しひんやりとしてきた。あの時のことを思い出しながら、銀座の街を進んでゆく。四丁目の交差点まで来て、あの時と同じように上を見上げる。和光の時計台が温かい光を発して、現在の時刻を示している。あの時に自分の心にこみ上げてきた不思議な感覚を今日は感じない。

当たり前だろ、もう十七年も前のことだ。それにお前は一人なのだから。自分に問いかける。もう疲れてしまった。自分に向けて、話しかけるのは。

交差点を左に曲がり、二本目の角をまた左に曲がる。この道に入るのはあの時以来、三回目だ。住所を確認して周りの建物に気を配る。あった。ここだ。

あと三十メートルぐらい歩いた所だっただろうか、田中さんと一緒にいった“朧月”というお店は。道の先を見ると道路の右手に公園があった。そうだ、あの公園だ。桜の木はまだあるのだろうか。

坂上さんのお店を訪ねて、保険が満期になることを知らせ、更新の話を持ち出す。静岡の支社にいる契約時の担当者の名前をだすと坂上さんは懐かしいなあと言って顔をほころばせた。更新の話はすんなりとまとまった。三十分ぐらいの和やかな談笑のあと坂上さんの店を後にした。

時計を見ると時刻は十九時五十分だった。僕はその道の先に向かって歩き始めた。“朧月”はまだあるのだろうか……

ここだ。ここのはず。地下に続く階段。そこには“朧月”の看板はかかっていなかった。階段の両側には青い光のトーチがついており、そこで足を止めた人を誘っているようだった。僕は自分の意思ではない、何かに突き動かされて階段を下りて行った。

階段を降り切って、左側にある扉を開ける。入ってすぐに狭い受付のようなカウンターがあ

った。そこには月隠（つきごもり）と書かれた表札がおいてある。

「大谷弘樹様、おいでになりましたね。お待ちしております」

淡いピンクのスーツを着た三十代後半ぐらいの女性が、落ち着いた声で僕に挨拶をした。どこかで一一見たことがあるような気がした。でも、記憶をたどっても、はっきりとこの女性の存在が僕の頭の中にあるわけではなかった。

占い師？ だから初めての客にこんなことをいうのだろうか？ なぜ、僕の名前を知っているのだろうか？

「どうぞ、お座りください」

暗くてよく見えなかったが、カウンターの前には黒い小さめの椅子が置いてあった。よくわからないまま言われたとおりに椅子に座る。普通なら不審に思ってすぐに店を出て行くのだろうが、僕はなぜが素直に椅子に座ってしまった。

「とうとう、あと一週間ですね」

顔色一つ変えずに淡々とした口調で女性は言った。

「何がですか？」

「あなたの寿命」

「はい？ あの、あなたは占い師か何かですか？」

「いえ、違います」

「じゃあ、勝手に人の寿命なんて言わないでくださいよ。しかも一週間だなんて」

「忘れてしまったのなら、それでも結構です。でも、あなたはこの一週間で、過去にあなたと関係のあった二人の大事な人と再会します。その時間を大事にしてください。最後の日を迎えた時に後悔のないように素直な心で向き合ってください」

この店に入ってから、すべてが胡散臭くて信じられなかったが、目の前にいるこの女性が今、話した言葉は何のわだかまりもなく僕の心に入ってきた。

僕は立ち上がり、何も言わずに店の外に出た。階段を上がって外に出る。入るときに点いていたトーチの青い光は消えていた。

一週間……本当なのだろうか。僕は持病など何も持っていない。健康そのものだ。一週間後に死ぬとしたら、事故か何かだろうか。……でも、いいか、それでも。あと一週間しか生きられなくても、両親はもう二人ともいないも同然だし、僕自身に家族がいるわけでもない。それでもいい。

しかし、二人の大事な人とは誰だろう？ 疑問に思う必要はなかった。僕が三十八年間の人生で深い関わりのあった人間はほとんどいないのだから。

四月二日。朝六時に起きる。今日も仕事の日。いつも起きる時間だ。朝食はトーストと紅茶、あとはたまに目玉焼きも作る。今日はその“たまに”の日だ。賞味期限ぎりぎりの玉子を割り、フライパンに落とす。十秒後に水を入れ、ジューという心地の良い音の後にふたをする。

食パンをトースターに入れ、タイマーをまわす。僕はやや強めに焼くのが好きだ。そして振り返り、口にふたをされて、もごもごしている目玉焼きのフライパンに向き合う。

考え事——昨日のあの出来事は何だったんだ。

ふたをされたフライパンから聞こえる音が小さくなってきた。もうすぐ窒息しそうなそんな音。

考え事——本当に一週間なのか。

ふたの隙間から煙のようなものが上がる。匂いがする。

僕はハッとしてふたを開けた。目玉焼きは縮まって、よくアニメとかである泣きそうな時の目の玉の形になっていた。ひっくり返すと丸焦げだ。

さすがにトーストはタイマーをまわしているので良い具合に焼きあがった。紅茶を入れる。紅茶にレモンを入れる。紅茶に砂糖を入れる。

朝食を食べ終え、上着を着て、コートを着て、カバンを持って家の扉を開ける。玄関を開けて三歩ほど歩いた時に頭がぐらぐらした。腹に激痛が走り、脂汗が出てくる。僕はよろめいて、マンションの廊下に倒れた。

気が付くと、そこは病院のベッドの上だった。

「気が付きましたか？ 体調はどうですか？」

「はい、今は大丈夫です」

「急性胃炎ですね。おそらくストレスからくるものだと思います」

ストレスか……

「今日は半日かけて点滴を打ちましょう。栄養剤と痛み止めを入れてあります」

こんなことは初めてだった。しかも、タイミングが良いというか悪いというか。銀座のあの地下にいた女性に言われたことが気にかかった。実は自分の身体には異変がおきているのではないか？

僕は不安な気持ちを抱えて、家へと帰った。死んでしまっても構わない——それはやはり強がりだった。急に本当に最後の日が近いのではないかと怖くなった。

四月五日。僕は池袋から東武東上線に乗り埼玉県武蔵嵐山という場所に向かっていた。手に二つの花束とお線香とライターが入った紙袋を持ち、電車から見える外の景色を眺めていた。電車の中はガラガラで席はいくらでも空いているのだが、僕は座らなかった。外の景色を眺めていたかったからだ。

一時間ほどして、電車は武蔵嵐山の駅に着く。霊園の事務所に電話をして、送迎車を呼ぶ。十分ほどで、送迎車は駅に到着した。

「どうぞ」

運転手が穏やかな声で僕に言った。僕は車に乗り込んだ。他に霊園に行く人がいないか、五分ほど待ち、誰もいなかったので車は出発した。

「今日は暖かくていい日ですねえ」

「そうですね」

「霊園の桜も満開で綺麗ですよ」

「そうですか」

運転手は五十歳ぐらいだろうか、物腰の柔らかい感じで、話し方や雰囲気は父に似ている気がした。こみ上げてくるものがあり、僕は話しかけてくる運転手に対して素っ気ない会話しかできなかった。

車が霊園の事務所に着いた。父の墓はここから少し坂を登ったところにある。五分ほど歩いて、その墓がある一角に着いた。手桶に水を入れ、柄杓を持つ。父の墓の方に視線を向けると、そこに一人の女性がしゃがんで目を閉じ、両手を合わせていた。

二十五年ぶりだった。あの日以来だった。その女性を最初に見た時、一瞬、僕の心に憎悪のような感情が湧いた。でも、閉じた目から涙をこぼすその女性の顔を見て、それはすぐに消え去った。

母だ。銀座のあの店の女性が言っていたことは本当だった。僕はゆっくりと母の方へ近づいて行った。

「おひさしぶりです」

「……」

母はゆっくりと立ち上がり、僕の方を向いた。二十五年ぶりにみた母親の顔は痩せこけていて、六十一歳のはずの母はとても老けて見えた。まるで老婆のようだった。その姿をみて、胸の奥にあった憎悪はほぼ消えて、ここまでの母の変化を一度も見ることができなかった、悲しみが湧いてきた。

「弘樹、立派になったね。本当に、本当にごめんなさい……」

「父さんのことはいつ知ったの？」

「出て行ってから二年後にね、こっちに帰ってきたの。不倫していた上司に捨てられて。寄りを戻してほしいなんて、ずうずうしい気持ちではなかったのだけど、お父さんと弘樹の顔を見たくて……気づかれないように一目でもと思ってね。そうしたら、家が引き払われていて。その時に隣の斉藤さんが偶然、外に出てきてね。事情を聞いたの。罵倒されたわ。斉藤さんに。あなた、最低の女よねって言われた。そうだよ。わかっている。だって、私が、私がお父さんの命まで奪ってしまったんだものね……」

「何で、何で父さんを捨てたんだ。そんなにその上司に魅力があったのか。僕のことは息子のことは大事に思わなかったのか……」

強い口調で言ったつもりだったが、最後の方は声が小さくなって涙ぐんでしまった。今更、責めても何にもならない。独身で兄弟もない僕にとっては、唯一の家族なのだ。

「母さん、今はどうしているの？」

「大阪で暮らしている。水商売で貯めたお金でブティックを経営しているの」

「一人？」

「うん。お父さんのことを知ってから、償いのつもりで生きている。自分はまだ他の誰かを好きになったりしちゃいけないんだって」

「……」

「弘樹は幸せに暮らしているの？」

「……ああ、幸せだよ。結婚して子供もいる」

嘘をついた。本当のことは言わない方がいいと思った。

「そう、それならよかった」

「この後は大阪に帰るの？」

「うん、仕事忙しいからね。弘樹、これからも、お父さんのお墓参りだけはさせてもらっていい？」

「もちろん。父さんのこと忘れないでやってほしい」

「ありがとう。やっぱり弘樹はお父さんの子だね。私に似なくて本当に良かった……」

細い足で母はお墓を後にして階段を坂を下りて行った。母とはもう二度と会えないと思っていた。

僕たち家族は二十五年ぶりに三人になった。

四月八日。あの女性の予言の通りなら、今日が僕の最後の日になる。朝七時に目が覚めた。身体には何の異変もない。今日は平日だが、会社には有給休暇を出していた。あの女性が言ったことを信じたわけでもないが、今日は何か特別なことが起きるような気がしていた。

一人とは再会した。もう一人は……僕の頭の中に浮かぶのはあの人。ただ一人だけだった。

朝食をとり、シャワーを浴びて、外へと出かける。どこに行こう。僕はあまり考えずに普段、よくいく場所へ一人で向かった。

初めに海辺の公園へ行った。家から近いので、休みの日で天気がいい時はいつも自転車で行っていた。今日は春らしい暖かい陽気でとても気持ちがいい。

その後、六本木の美術館へ行った。絵画展を見るわけではなく、ホールの一階のソファに座って本を読む。一時間ほど、読書をした後は美術館の外に出て、近くにある公園へと向かう。近代的な真新しいビルの裏にあるこの公園には、庭園もあり、人工的な美しさと植物の本来の美しさが合い重なって、僕は大好きな場所だった。

午後一時を過ぎても、なにも変わったことはなかった。身体に異変もない。日比谷線に乗り、恵比寿に出る。よく通っていた、ラーメン屋で昼食をとる。これが最後の食事になるのだろうか？ 食事を終えて、これもまたよく通っていた喫茶店へと入る。そこで三時間ほど、読書をして過ごした。

日が暮れてきた。

僕は山手線に乗り、有楽町へと向かった。とうとう、その時が近づいてきた。僕には何故だか根拠のない確信があった。

有楽町の駅へと着いた。僕はまたあの道を歩いた。銀座四丁目の交差点を曲がった。二本目の道を左に入った。六十メートルほど歩いた。右手に公園がみえた。そこに……一人の女性がベンチに座っていた。見覚えのある顔だった。十七年ぶりだった。あの時、この場所で彼女を抱きしめた。彼女は僕に気づいて、にっこりとほほ笑んだ。

僕は彼女の方に、公園の奥にあるベンチの方に歩いて行った。僕は彼女の隣に座った。

「なんで、ここにいるんですか？」

「この公園の桜が好きだから、この時季は毎日来ているの」

「たまたま、今年の春だけですか？」

「毎年。十七年前のあの時からずっと桜のつぼみが膨らみ始めて、満開になって散ってしまうまで、夜の六時から七時まで、ここで本を読んだり、昔のことを思い出したり……」

「僕を待っていてくれたのですか？」

「大谷君、そういうところもあったんだね。自惚れだとは思わないの？」

「……」

「思わなくていいよ。自惚れだなんて、あなたのことが好きなのは本当だから」

「……」

「三十八歳、だよな。結婚とかしているの？」

「……いや、ずっと一人です」

「何で、もったいない。大谷君もてるでしょう」

「十七年前と一緒に食事に行った時も同じことを言われました」

「よく覚えているね」

「はい、あの時のことは忘れられません」

「まだ、抱えているの？ 女性を信じられないトラウマ」

「いや……わかりません。でも僕はずっと後悔していました」

「後悔？」

「あの時、田中さんの気持ちを受けとめられなかったこと。僕は間違いなく、あなたに惹かれていました。あなただけは信じられるような……でも確信が持てなかった。本当は何も考えずにあなたのことを好きでいたかった。でも、どうしても心の奥に植えつけられてしまった腐った根が花を咲かせることを許してくれなかったんです」

公園の桜は満開だった。春の風になびかれて、桜の花びらがちらほらと降り注いでくる。

「わたしもあの後、誰とも付き合わなかった。また、裏切られるのが怖かった。それにずっと、大谷君のことが心の中に残っていた。わたしね、自分でもよくわからなかったの。どうしてこんなに大谷君のことが好きなのかって。でもね、あの時のあの瞬間にあなたへの想いに芯が通った。そんな感じがしたの」

「それはいつですか？」

「覚えている？ 大雪が降ってわたしたち二人だけで店を開けた時のこと。あの時はお店が暇で、大谷君、ヴィーナリーベってパフェを真剣に集中して、すごくきれいに形を作ったでしょう。わたしはその時の大谷君をずっと見ていた。パフェグラスを用意して、フルーツをカットして、アイスに乗せて、生クリームを絞って、キウイソースをかけて、ロールクッキーに乗せて。できあがったそのパフェをわたしが、受け取った。銀のトレイの上に乗せた。なんでもない仕事の中の一コマだけど、あの瞬間はたった一度きりの大切な時間だった。いつもは忙しくて、ただ仕事をこなすことだけを考えていた。でも、あの時だけは違ったの。特別な時間だったの」

僕はあの時のことを鮮明に思い出した。十七年前とは思えない、色あせない鮮やかな記憶だった。

働いていた店から、外の雪景色を見ていた彼女の表情。厨房でパフェを作って渡した時の彼女

の笑顔。銀座四丁目の交差点、和光の時計台を見て感じた、いとおしさ。朧月で一緒に食事をして、打ち明けたお互いの過去。その後に公園の桜を見上げる彼女の横顔。翌日、同じ公園で抱きしめた彼女の温もり。

もう一つ思い出した。僕の心の鍵穴にあの時、現れた鍵が刺さっていたままだったということを一

鍵は回された。カチャリという小さな音がした。扉が開いた。僕は心から――彼女を好きになった。

「田中さん……僕は水を、光を求めてもいいですか？ そうすれば花は咲くのですか？」

彼女はじっと僕の目を見つめている。

「僕はあなたのことが好きです」

緊張などしなかった。こんなにも素直に自分の気持ちが言葉に変わったのは、三十八年間生きてきて初めてだった。

「こんなおばさんでも本当にいいの？」

彼女は無邪気に笑った。その笑顔は十七年前の彼女の笑顔となんら変わりがなかった。

僕も笑顔で頷き、彼女の目を見つめた。僕は彼女の方に近づいて行った。彼女を抱きしめようと。

その時だった、急に胸に痛みが走った。苦痛に顔が歪み、立ってられなくなる。その場にうずくまり意識が遠のいていく。

彼女の顔を見上げる。彼女は時間が止まってしまったように、呆然と立ち尽くしている。やっと、やっと、人を愛せると思ったのに。やっと、母への憎しみを消すことができたのに。

“死んでもいいか”なんて嘘だ！頼む！僕を生かしてくれ……

意識が朦朧とする中、僕はあることを思いだした。そうだ、今日を最後の日にしたのは僕自身だった。五年前、“月隠”にあの地下の場所に僕は行っていたのだ。

そう、やはりあの時も吸い込まれるように地下の階段を下りて行った。階段のトーチの明かりはオレンジ色だったような気がする。階段を降り切って左側の扉を開けた。そこには薄いピンクのスーツを着た三十代くらいの女性が座っていた。

「よくおいでくださいました。あなたの心はわかっています。人生を終えたいのですね」

何も言っていないのにこの女性は僕の心を見抜いていた。そう、僕は生きる意味を見失っていた。

信じる人もいない。信じる道もない。人を愛することもできない。僕は毎日をただ、無意味に生きていた。もう、こんな人生なんていない。そう思っていた。

「今なら、最短で五年後の三月二七日から四月一五日までが空いています。ご予約されますか？」

「予約？」

「はい、寿命を終える“予約”です」

「……」

「悩んでおられますか？ それは当然のことです。でも、あなたがお望みならば、その時の直前ま

でキャンセルすることもできます。あなたは意識をしてなくても必然的にもう一度、この場所に来ます。その時におっしゃってください」

そうだ。まだキャンセルできるかもしれない。今日を最後の日にしなくて済む。“月隠”は目と鼻の先だ。今から、そこに行けば……

必死になって僕は前に進もうとする。しかし体に力が入らない。胸の苦しみが断続的に襲ってくる。

わずかな苦しみの隙をついて前に進む。もう一度、彼女の方を見上げる。彼女はなぜか立ち尽くしたままだ。

二十分をかけて、僕は地下へ続く階段にたどり着いた。這いつくばって階段を下り、左側の扉を開ける。

「キャンセルしてくれ」

暗闇に向けて僕はそういった。人がいるかもわからなかったが、とにかく僕は精一杯の声を振り絞りそういった。

「かしこまりました」

その声が微かに聞こえて、その後僕は意識を失った。

六月八日。じめじめとした梅雨の中休みで今日は朝から晴天に恵まれた。ベランダから桜の木が見える家に住みたい。彼女の希望を最優先にして、新居を選んだ。僕たちは昨日から一緒に暮らしている。南向きで日当たりのいい、公園の桜並木に面した、とても素敵な部屋だった。来年の春がとても楽しみだ。毎年、僕たちはここから二人で満開の桜を見ることができる。

今日は朝から、段ボールに入っているそれぞれの荷物を整理していた。「あった。この箱だ」僕はその箱から食器類を出した。

「ちょっと疲れたね。休憩にしようか？」

「そうだね」

「じゃあ、あれを作ろう」

「久しぶりだね、本当に」

昨日、近くのスーパーでフルーツとお菓子とアイスクリームと生クリームを買っておいた。

生クリームをボールに注ぎ、ホイッパーで泡立てる。そして、箱から出したばかりのパフェグラスを水で軽くすすぎ、そこにアイスクリームをのせる。その周りにカットしたキウイ、アプリコット、オレンジを乗せる。次に生クリームを絞り、キウイソースをかけロールクッキーを乗せる。

出来上がった。

「できたよ。一緒に食べよう」

「うん」

僕と彼女は一緒に暮らしていく。これからもずっと、一緒にいる。もう、お互いに過去のような辛い経験をするのではないはずだ。そして、銀座のあの地下の部屋に行くこともないだろうー

人生最期の言葉

「ごめんなさい。やっぱり私、産めない」

「うん、そうだよな」

「今の私たちでは、この子を幸せにできないよ」

「うん」

「明日、病院に行ってくる。本当にごめんね」

「わかった……俺の方こそ、無責任でごめん」

※ ※ ※

一時限目は国文学史の授業だった。大きな教室の一番後ろの席に着く。教授の声は微かに聞こえているが、僕の頭の中には入ってこない。頭の中は彼女との間に起こってしまったことでいっぱいだった。

授業は続く。教授の声も聞こえている。でも、僕は一番後ろのドアから教室の外に出た。

外はきりりと引き締まった、冷たい空気が流れていた。屋上から見る東京の街は高いビルや、低いビルや、建設中の電波塔や、小さなぼろいアパートや、とにかくたくさんの種類の建物とわずかな緑と道路と公園といろんなものでぎっしりと敷き詰められている。

あのビルにもあの公園にもあの道路にもあのアパートにもあの電波塔にも命が動いている。

外にはあらゆる所に命がある。その命はすべて母親の体の中から出てきたものだ。

……こんなことを真剣に考えたのは初めてのことだった。今、僕と彼女は一つの命の行方を握っている。僕の言葉で彼女の行動で僕と彼女の決断でその命の行く先が決まってしまう。

冷たい風が顔に当たる。身体にあたる。寒さを感じる。それは僕が外にいるから、生きているから。

本当にいいのだろうか――。

僕たちの決断は間違っていないのだろうか。

空の青さと、刺すような冷たい風に耐えられなくなり僕は建物の中に入った。

エレベータで二階に降りた。正面にのびる廊下を歩き、扉を開ける。話し声は一切聞こえない。紙がめくられる音、筆記用具が紙の上をすべって行く音。その静かな空間に入ると自分の心臓が鼓動している音も聞こえてくるような気がした。

特に読みたい本があるわけではなかったが、何も読まずにただじっと座っているわけにもいかないので、僕は当てもなく本棚を見て回った。

”谷崎潤一郎全集””坂口安吾全集””三島由紀夫全集”

国文学科の僕にとっては見慣れた本ばかりだ。その全集の中に一冊だけとても薄くて表紙にタイトルすらも書かれていない本が挟まっていた。

僕は思わずその本を手にとった。

『人生最期の言葉集』

本を開いてみると、多くの人の人生最期の言葉が一ページに一文ずつ記されていた。

「今までありがとう」

「本当に楽しかった」

「幸せだったよ」

「ごめんね」

「コーヒーが飲みたい」

「もっと……」

「タバコが吸いたいなあ」

「もう一度、逢おうな」

「やっと、死ねる……」

「まだ……」

「死にたくない！！！」

そのほかにも多くの人の人生最期の言葉が記されていた。

病院で死にゆく人の最期の言葉。

自宅で家族に見守られながら死にゆく人の最期の言葉。

人生に絶望し、ビルの屋上でつぶやいた最期の言葉。

突然の事故に遭い車の中でうめいた最後の言葉。

誰もが想像するであろうありきたりな言葉が多かった。しかし、次のページにはかぎかっこのついていないこんな言葉が書かれていた。

この世に生まれたかった――

これは……そうか、これも最期の言葉なんだ。文章にするとかぎかっこを付けることもでき

ない、誰とも会話できずに母親の胎内でかき消されてしまった、声にならない最期の言葉なんだ。

そう、まだ生まれていないが命なんだ。命が宿ったんだ。それなのに僕らはそれを閉じ込めたまま消し去ろうとしてしまっている。

僕目からとめどなく涙が流れてきた。間違っている。やはり僕らの決断は間違っている。

僕は駆け出して、その部屋を出た。建物から外に出た。バスに乗った。そして二つの命が存在している自分の部屋へと駆け込んだ。

息を切らせて、勢いよくドアを開けた僕をみて彼女は驚いている。

息を整える間もなく。僕は彼女に向かっていった。

「産んでくれ……必死に頑張ればきっと幸せになれる。お前のおなかの中には命が宿っているんだよ。その命は外に出て、空気を吸いたいはずなんだ。外の世界を感じたいはずなんだ。俺たちと、たくさんの人たちと話したいはずなんだ」

彼女は何も言わなかった。僕の目をじっと見つめている。彼女の目に涙がにじんでくる。一筋の涙がこぼれた時、彼女は携帯電話を手に取った。

「もしもし、先ほど明日で予約を取った柏田というものですけど、キャンセルしていただけますか……」

それだけ言うと、彼女はその携帯電話をテーブルの上に置いた。

「おなか減ったね。お昼、マックがいいな」

彼女は笑顔で言った。そして、もう一言。

「ハッピーセットにしようか、おもちゃ一緒に選ぼうね」

彼女のその一言はきっと僕だけにではなく、これから生まれてくる新しい命にも向けられたものだったのだろう――。

僕たちは部屋の扉を開けて、外に歩いていった。外はやはり冷たい風が吹いていた。でもそれを感じる僕たちの心には新しく宿った命の温もりが広がっていた。

もう、死にたい――。

この冬、一番の寒さとなった東京の街を俺は身体をすぼめ、うつむきながら何の目的もなくただ歩いていた。流行おくれのダウンジャケットと薄汚れて、よれよれになったスニーカー、毛玉だらけのニット帽。絵に描いたような、しょぼくれた中年おやじ。傍からはそう見えるだろう。

何もかもうまくいかない。俺は自分の人生に絶望していた。

四十二歳。フリーター。独身。つい先月、不況のあおりを受けて会社をリストラされたばかり。こんな情けない男になってしまったのは世間のせいでも神様のせいでもない。不甲斐ない自分の生き方のせいなのだ。俺は十分にそれを自覚していた。

それでも、俺は四十二年の今までの人生を無気力に過ごしてきたわけではなかった。自分なりに精一杯の努力をして生きてきたつもりだった。

ただ、間の悪さ、要領の悪さ、運の悪さとここぞという時のひと踏ん張りができなかったのが今の惨めな状況を作ってしまったのだ。

疎外感が心だけではなく全身を蝕んでいた。自分には社会的価値も人間的価値も全くない。俺がこの世からいなくなっても、何も変わらない。その思いが頭の中と心の中を占拠していた。

「何かお悩みのようなですね」

うつむきながら歩いていた俺の耳に突然その声は聞こえてきた。

なんだか聞き覚えのあるような声だが、その顔を見ると全く知らない人間だった

「どなたですか？」

「だれでもいいじゃありませんか。いや、あなたがかなり思いつめた表情で歩いていらしたのでね。つい声をかけてしまいました」

黒のスーツに黒のネクタイ、小太りで色白の男。なんだ、コイツ？マンガに出てくる奴みたいだな……。

「私の後をついてきていただけますか。あなたの望みを叶えることができる場所へご案内いたしますよ」

もちろん怪しいとは思ったが、なぜかその男の言葉に惹かれて俺は後をついて行ってしまった。

繁華街を抜け、古びたビルの前でその男は立ち止った。その時、妙な視線を感じて道路の反対側に目をやった。すると、空き地の前にラーメンの屋台がでており、おやじが麺を茹でながら、こちらを見ている。不気味に思っているところに、あの男の声が耳に飛び込んでくる。

「さあ、着きましたよ。ここの二階です」

そこは真っ白い壁、真っ白な床。広さ二十畳ほどでなにもない無機質で空気が冷たく不気味なまでに静まり返った部屋だった。

後方には壁一面にはめこまれた大きなガラス窓。その向こうにはどうやら何人かの人がいるようだ。

それは俺が知っている人間だった。田舎で一人暮らしをしている母親。三十五年の付き合いの

友人である武。そして、五年間付き合っ同棲している恋人の由紀子。

母親の顔を見るのは五年ぶりだ。父親の葬式で実家に帰って以来、しばらく連絡を取っていなかった。心配をかけてはいけないと、自分の今の状況を知らせることもできなかった。

変わりなく正社員で立派に働いていると母親は思っているだろう。リストラされて、四十代でフリーターだなんて言えるはずもなかった。

携帯の留守電に入っているメッセージを一方向的に聞くだけで息子である自分の声を聞かせてやることもしていなかった。それこそが母親に心配をかけているじゃないかと自覚もしていた。

武とは三ヶ月前に久しぶりに電話で話しをした。実家の電気屋をついで、嫁さんをもらうことになったと、再来月に結婚式をするから待っているぞと幸せそうな声で話していた。

もちろん行くよ。と返事をしたがご祝儀を出す余裕もないし、なによりこんな自分だ。あわせる顔がない。

由紀子とはついさっき、別れ話をしたばかりだった。どうしようもない俺をずっと励まし支えてくれた由紀子。

由紀子の為にも何とか頑張っ人生を成功させるんだと思っていたが、どうにもうだつが上がりず、このままでは不幸にしてしまうと思ひ、自分から別れを告げたのだった。

今の俺に女性と付き合う資格なんてない。

しかしなぜこんな場所に彼らがいるのだろうか？

俺がこの部屋に来るなんて知らないはず。俺に声をかけてきたこの男が仕組んだのだろうか？

訳もわからないまま、部屋をよく見渡すとガラスとは反対側の壁に一つのボタンと二行ほどの文章が書かれていた。

”このボタンを押せばあなたはまったく苦しまずに今すぐ死ぬことができる”

”どうしますか？ボタンを押しますか？”

「本当ですよ。あの壁に書かれている言葉は」

俺をここに連れてきた男がニヤニヤしながら話しかけてきた。

「あなたの望みが叶うんですよ。」

にわかには信じられなかったが、壁に書いてある文章の通りになったなら幸せだろう。楽になるだろう。そう思った。

俺は今までに起こった様々な出来事を思い出していた。辛いこと。苦しいこと。ささやかではあるが幸せであると感じたこと。

迷っていた。そのボタンを押そうか押すまいか。

しかし.....、俺が死んだら母親はどれだけ悲しむだろうか.....。夫を亡くし、一人っ子の息子までも先にあの世に逝き.....、残される母親のことを思うと胸が痛くなった。

結婚が決まって、やっと幸せをつかんだ友人にも、水を差してしまうようで迷惑をかけてしまうだろう。

そして、恋人の由紀子.....。彼女はもしかしたらまだ、俺のことを思ってくれているかもしれない。本当は別れたくなどなかったのだけど、不甲斐ない俺を励ましてくれた笑顔が、それに応えられない自分が情けなくて、由紀子と顔を合わせるのが苦痛になってしまったのだ。

こんな自分にも関わってくれる人間がいる。どんなに辛くても、やはり死ぬべきではない――

うっ、ううーっ。思いとどまろうとしたその時、また違う感情が心の底から湧きあがってきた。天使が心の外に押し出そうとした膿を悪魔が引き戻してしまったようだった。

でも……、でも……、生きているのが辛い。楽しいことなんて何もない。充実感を得ることなんて何もない。俺は、俺はもう無理なんだ。

次の瞬間、電車が鳴らす警笛のような大きな音が建物内に響き渡った。

俺は――。

そのボタンを――。

押したのだ。

しかし、自分の身には何も起きない。なんだ、何も起きないじゃないか。その時、後方で何か物音がした。人が倒れるような音。振り向くと、母親と武と由紀子が倒れていた。

「なぜだ！ 俺が死ぬんじゃないのか！ おい、どういうことなんだ！」

俺をここに連れてきた男を捜すがいつの間にか姿が消えていた。

「ひどいじゃないか……。死にたいのは俺なんだ。あいつらは死にたいだなんて思っていない。これじゃあ、俺が殺したみたいじゃないか」

このボタンを押したせいで――。

俺はもう一度壁にあるボタンを見た。すると、ボタンの上書いてあった文章の内容が変わっている。

”このボタンを押せばあなたの大事な人を助けることができる”

”しかし、あなたは二度と自分で死を選ぶことはできない”

”どうしますか？ ボタンを押しますか？”

「本当ですよ。あの壁に書かれている言葉は」

いつの間にかあの男がさっきと同じ笑みを浮かべて話しかけてきた。

「初めに書かれていた文章は嘘だったじゃないか！」

俺は男の胸ぐらを掴み、涙を飛ばしながら叫んだ。

「でも、あなたの大事な人を救うためには押すしかないんじゃないですか？ あのボタンを。ただ、この先あなたがどんなに辛い人生を送ったとしてもあそこに書いてある通り、自分で死ぬことはできなくなりますけどね」

迷いはなかった。

次の瞬間、またも電車が鳴らす警笛のような大きな音が建物内に響き渡った。

俺は意識を失いその場に倒れこんだ。

冷たい水滴が右手の甲を突き刺した。俺はびくっとして意識を取り戻した。誰も居ない公園のベンチで眠っていたようだ。なんでこんな所にいるのだろう？ さっきの出来事はなんだったんだ！ みんなはどうなった！ あの男はどこにいる！ 周りを見渡してもそこには誰もいなかった。

とりあえず、母親に電話をかけてみよう。ポケットから携帯を取り出し開くと留守電のメッセ

ージが三件入っている。すぐにメッセージを再生した。

「母です。変わりはないかい？ 昨日、あなたが自殺する夢を見てしまってね。不安でいてもたってもいられなくなって電話してしまったの。何か困ったことがあったら、相談してね。そうじゃなくても声だけでも聞きたいからお願いだから連絡をください」

一件目は母からだった。十分前に残されたメッセージだった。良かった母親は無事だったんだ。

二件目は武から、同じような内容のメッセージだった。そして最後に入っていた三件目のメッセージを聞こうとしたその時だった。

目の前に今にも泣き出しそうに眼に涙を浮かべた由紀子が立っていた。

「健ちゃん……、もう五年も付き合っているんだから、健ちゃんのことにはよくわかってる。要領が悪くて、曲がったことが嫌いで、仕事がうまくいかなかったよね。でも何時でも一生懸命で優しく、私のことを思って頑張ってくれていた。そんな健ちゃんを見て、私も頑張ろうって思えた。だから、私は健ちゃんと一緒にいたい。別れるのを考え直してもらえないかな……」

俺は立ち上がり、由紀子の体をぎゅっと抱きしめた。涙が自然とこぼれ落ちた。

「濡れたら、風邪ひいちゃうよ。帰ろう」

そう言って、由紀子は付き合い始めたときからずっと、失くしもせず、壊しもせずに二人で使っている大きな赤い傘をさした。

家へ帰ろうと公園を出ようとした時、ふと公園の向かい側を見ると、見たことのあるおやじが屋台でラーメンを出しているところだった。はっとして、まだ聞いていなかった三件目の留守電のメッセージを聞いてみる。

「いやあ、お元気ですか」

あの男の声だった。

「あなたが死ぬことはあなたの母親にとっても友人にとっても恋人にとっても、自分が死ぬのと同じくらいショックな出来事なのではないですか？あの時、あなたが最初にボタンを押した時に彼らが倒れたのはそういうことです」

三件目のメッセージの声は死んだ父親の声にそっくりだった――。

「リストラか……」

こんな時代だ。珍しいことではない。

私は大手菓子メーカーに勤務していた。入社して二十五年、真面目に働いてきた。商品開発部門に所属をし、いくつかのヒット商品も生み出した。会社への貢献度はそこそこあったはずだ。

入社したばかりの頃は、美味しくて安全なお菓子を作って、子どもたちを喜ばせてやるんだ。そんな思いを胸に働いていた。

しかし、何故だろう。仕事を失うことは大変なことだが思いのほか冷静な自分がいた。悔しい、悲しいという気持ちが湧いてこない。自分はいつの間にか仕事に対しての情熱を失ってしまっていたのだろうか――。

誰もいないオフィスで段ボール箱を自分のデスクに置き、書類などの私物を詰め込んでいく。ドラマなどでよく見る光景だ……と自分で思う。仕事を辞めてしまうのだから、もう必要ないだろう。そう思ってもなかなか捨てられないものばかりだ。

少しずつ寂しさが、やるせなさが、空しさがこみ上げてくる。夜になり、暗くなった外を見る。最初に視界に入ったのは、外の景色ではなくてガラス窓に映った自分の顔だった。

今にも泣きそうな顔だった。もし僕が今、五歳ぐらいの子供だったら、お母さん……って母親に泣きついていただろう。

私物をすべて詰め込んで、段ボール箱にふたをする。「入れすぎだな……」ひとり呟く。ガムテープで強引にふさいでも、箱の上部は少し盛り上がってしまう。

着払いの伝票を張り付けて、オフィスの端の決められた場所にその段ボール箱を置く。社内からの宅急便はここに置いておけば、運送会社が勝手に持って行ってくれる。

これで、すべて終わった。オフィスを出て鍵をかけ、管理室に行き鍵を返す。

「お疲れ様です」警備員に挨拶する。

「お疲れ様でした」警備員が挨拶を返す。

明日からはしばらくこの言葉を使うことはない――。

子どもの頃、やはりお菓子が大好きだった。

毎月、お小遣いをもらうとすぐに百円を握り締め近所の駄菓子屋に行ってお菓子を買った。一度にお小遣いを使うと楽しみがなくなってしまうので週に一回ぐらいのペースで通っていたと思う。

あれは確か小学一年の時だった。いつものように百円を握りしめてお店に行こうとした時、クラスのカキ大将に声をかけられた。

「おい！ 今からケンカするぞ！ 勝った方が負けた方に百円渡す。いいな！」

細くて力のない僕に勝ち目なんてあるわけなかった。逃げようと思った。――でも逃げたくなかった。そんな惨めなことはしたくなかった。僕は負けるとわかっている戦いに挑んだ。

「あら！ どうしたの？ 顔に傷なんか作って、ケンカでもしたのかな？」

戦いの後、お菓子も買えやしないのに僕は駄菓子屋に行った。いつも行く駄菓子屋のお店の人は三十代ぐらいの女の人だ。僕はうつむいて涙をポタポタ、地面に落としながら言った。

「負けたから、百円取られちゃったんだ。ケンカに負けたから……」

「自分からケンカするって言ったの？」

「違うよ…ケンカするぞっていきなり言われたんだ」

「逃げられなかったの？」

「うん、逃げるのは嫌だったんだ」

「そう、えらい！ よく頑張ったねえ。それでこそ男の子。じゃあ、頑張ったご褒美にこれあげるから。元気出してね」

そう言って、お店の女の人はお菓子を差し出してくれた。笑顔がとても素敵だった。僕は初めて、お母さんとは違う女の人のやさしさを感じた。お菓子を受け取った僕はお菓子よりもその女の人の顔をずっと見ていた。……思えばあれが初恋だったのかもしれない。

懐かしい。ふと、こんなことを思い出してしまった。あの駄菓子屋はまだあるのだろうか――。

久しぶりだ、この駅の看板を見るのは。翌日、もう一度あの駄菓子屋の女の人に会いたくて私は三十五年ぶりに生まれた街へと降り立った。小学三年生の時に引っ越して以来の町。もう、おばあちゃんだよな。元気だといいいのだけれど。

駅からの町並みはすっかり変わってしまっていた。あの時は新しかったアーケードの屋根もすっかり曇って割れている部分もある。商店街はシャッターがしまっている店が多く、グレーばかりの暗い色合いになっていた。ところどころに空き地もあり、再開発予定地の看板が立っている。

確か豆腐屋の角を曲がって五十メートルぐらいの所だったよな。目印となる豆腐屋はやはりシャッターがしまり営業している様子はなかったがかすれた看板の文字に見覚えがあった。

このあたりのはずけど……やっぱり無くなっているようだな。肩を落として、来た道を引き返そうと後ろを向いたときだった

「おばあちゃん、僕にもお菓子ちょうだい！」

子どもたちがそう叫んで、私の横を駆け抜けて行った。振り返り、子どもたちが走っていた方向を見ると少し腰の曲がったおばあちゃんが台の上にお菓子を並べて子どもたちに配っているようだ。

きっと……あの駄菓子屋の女の人だ。

私はためらいながらも、お菓子を配っているおばあちゃんに近付いていった。

「あの、以前こちらで駄菓子屋を……」

「はい、やっていましたよ。つい最近、閉めることになってしまったのだけど」

私は来た道の途中にあった空き地の再開発の看板を思い出した。

「子どもたちに配っているのはお店の商品ですか？」

「ええ、返品もできないし捨ててしまうのはもったいないから。それに子どもたちの喜ぶ顔も見

たいですし」

「僕、子どもの頃、あなたのお店にお菓子をよく買いに来ていたんです。ただお菓子を買うだけじゃなくて、落ち込んでいた時とかあなたにいろいろ励ましてもらいました」

「そうですか、それは嬉しいねえ。でも、お店がなくなってしまってごめんなさいね」

「いえ、あの……私もお菓子をもらってもいいですか」

「ええ、もちろんいいですよ。どうぞ麩菓子です」

――あの時のことなど、覚えているはずもないだろう。私が誰なのかも覚えているはずないだろう。でも、偶然にもおばあちゃんは私に麩菓子を渡してくれた。

「……ありがとうございます。いただきます」

「あっ、隆ちゃん。今日は野球の練習はどうだったの？」

私の横にいたユニフォームを着た男の子におばあちゃんがチョコを渡して話しかけた。

「野球、止めようかなあって思うんだ」

「どうしてだい？」

「もう、つまらなくなっちゃったんだ。野球」

「あんなに好きだったのに？ ほかに好きなものでも出来たのかい？」

「いや、なんにも無いんだけど……」

「隆君、自分の好きなことがないなんてそっちの方がつまらないんじゃないかって、おばあちゃんは思うんだけどねえ。おばあちゃんはみんなにお菓子を食べてもらうのが好きだから、いつも楽しいんだよ」

「うーん……」

そう言うと隆君と呼ばれていた子どもは走り去っていった。

私は子どもの頃、駄菓子屋のおばちゃんと話したあの時の温かい気持ちと同じようなものを感じた。

「ごちそうさまでした。懐かしくて、とても美味しかったです」

「あの、失礼かもしれないけど……なにかあったんですか？ 元気がないみたいね」

「……はい。リストラです。会社をクビになってしまいました」

「そう、今おいくつですか？」

「四十四歳です」

「じゃあ、まだまだ大丈夫だねえ」

「はい？ 何が大丈夫なのですか？」

おばあちゃんは優しく微笑んだ。

「あと二十五年は働けるでしょう？」

「二十五年……ですか？」

「だって、あたしは七十歳ですよ。つい先日まで働いていたのだから」

「……そうですね」

「何か、やりたいこととかないのかい？」

「……」

自分のやりたいことは何なのだろう？ 子供たちの喜ぶ顔が見たかった。美味しいお菓子を食べた時の満面の笑み。自分が子供の時に感じたあの喜びを自分の手で届けたかった。だから、お菓子メーカーに勤めた。会社をクビになった今、自分は何をしたいのだろう。何をすれば残りの人生を価値のあるものにできるのだろう。世間では私のような人間を負け組とでも言うのだろう。でも、私はそれを悔しいとは思わなかった。惨めだと悔しがることもしなかった。ただ、無力な自分にうなだれているだけだった。

子供のころのあの気持ちはどこに行ってしまったのか。負けるとわかっていても、戦いに挑んだあの気持ちは――。

「隆君。自分の好きなことがないなんてそっちの方がつまらないんじゃないかって、わたしは思うんだけどねえ。わたしはみんなにお菓子を食べてもらうのが好きだから、いつも楽しいんだよ」

さっきの少年はもう立ち去ってしまったのに、おばあちゃんはさっき言ったのと全く同じことを口にした。

「ボケてるわけじゃあないからね」

おばあちゃんはおどけたように笑う。

「はい、わかっています」

わたしもおばあちゃんに微笑みを返す。胸にこみあげてくるものがあった。ついさっき聞いたセリフなのにとても新鮮に聞こえた。

私はおばあちゃんに深く礼をして、最後に一言、こう言った。

「私の初恋の人なんです」

「はい？」

「あなたがです」

心の中のもやが晴れて、自然と笑顔が出てきた。おばあちゃんはキョトンとした顔で私を見ている。

「これで失礼します」私はその場を立ち去った。そして、私は決意をした。

三ヵ月後、私はおばあちゃんがお菓子を配っていた場所に車を止めて、ある準備をしていた。カラフルな車体のワゴンの後ろのドアを一番上まで開けて、車の中から楽しそうな音楽を響かせる。何が始まるんだろう？近所の子どもたちが集まってきた。

その中にヘルメットをかぶり、グローブの隙間に金属バットを通し肩にかけている男の子がいた。土で汚れたユニフォームを着た彼はあのときの男の子に間違いなかった。

「隆君、おじさんのこと覚えている？」

「えっ、知らない」

「そうか……」

「野球は好きかい？」

「うん！ 大好き！」

「そうか……頑張れよ！」

私の心の中に何とも言えない心地よさが広がった。すがすがしい気持ちになった。ふと視線をそらすと、あのおばあちゃんが家から出てきて、こちらを見ていた。私はおばあちゃんに向かって一礼をした。おばあちゃんはこちらのほうに歩いてきた。

「あなたはこないだの……」

「はい。お店のお菓子はもう全部配ってしまったのですか？」

「ええ、配り終わってしまいました」

「私……自分の好きなこと、見つけました」

「そうですか、よかったですねえ！」

「はい、ありがとうございます。それで、あの、よかったらこれを」

私は初めて商品の袋を開けた。その袋から麩菓子を取り出しておばあちゃんに渡した。

「ありがとうございます。いただきます」

おばあちゃんは顔をしわくちゃんにしながら、にっこりとほほ笑んだ。そして、ゆっくりとその場を立ち去って行った。

私は深呼吸をして、満面の笑顔で、集まってきた子供たちに向かって言った。

「さあ、今日から開店だよ。お菓子の移動販売だ」

“おばあちゃん、おばあちゃんの言うとおりに、自分の好きなことがないなんてつまらないよね。少し形は違うけど、自分の好きなことをもう一度、やってみようと思うよ”

私の第二の人生が始まった。商売がうまくいくかどうかはわからない。でも、負けるとわかっている戦いではない。いや、負けるとわかってしまった時でも、最後まで全力で戦うんだ。そう、心に誓った。

今日は朝から快晴だった。時を経て、汚れてしまったアーケードの屋根から、薄い太陽の光が差し込んできた。

そして、暗く寂しい色に染まってしまった商店街には一人の大人と子どもたちの楽しそうな顔が光っていた。

「高橋さん、今日の最後は十八時〇八分の前陣峠までの臨時便をお願いできますか」

今日の最後ではない。私のバス運転手としての最後の運転がこの臨時便になるようだ。今日は前陣峠で夏祭りが行われるため、臨時の増発便がでることになっている。

四十七年間、ローカルバスの運転をしてきた。一日に五十人ほどしか利用しない駅から山の上の前陣峠のバス停まで、片道五十分の路線。

青森県東津軽郡大野町一。私の生まれはこの町ではないのだが、ここで長年暮らし働いて、本当のふるさとのように感じていた。バスのお客さんと言えば、いつも決まった人ばかり。私はこのバスを利用する多くのお客さんの顔と名前を憶えている。私にとっては自分のバスに乗ってくれるお客さんは家族同然だった。

この職を退いた後は東京にいる息子が建てた二世帯住宅へ引っ越しをすることになっている。長年勤めたこの仕事を辞めることは同僚も含め、この町の人々すべてとお別れするということになるのだ。

十七時五十分。事業所で軽い休憩を終え、最後の運転へ向かう時間になった。

「では、行って参ります」

同僚から高橋さんのあいさつはいつも堅いなあとわれ続けたこの言葉を、同じように口にして事業所を出た。

「はい、気を付けて……」

最後だというのに事業所にいた仲間たちの態度はなんだか素っ気ない。

ここからバスを発車させるのもこれが最後だ。バックミラーによくコーヒーを買っていた自動販売機と古臭いベンチが映る。ここで同僚と趣味である釣りの話や仕事の愚痴やお互いの家族のことを話したものだ。

事業所から駅までは五分ほど。左手には変電所。右手には倉庫と工場がポツリポツリと立ち並ぶ街の中では割と広い方の道を走る。

正面にところどころに錆びが入った小さなモニュメントが見えてきた。駅に着いた。いよいよ、最後の運転業務の開始となる。

しかし、駅前のターミナルの様子は例年の祭りの時とは違っていた。駅前には人がまったくおらず、シーンと静まり返っているのだ。始発となるバス停にも誰もいない。

おかしいな……。祭りの時は隣の町からも電車に乗ってお客さんが来るはずなのに……。運転席から駅舎のほうをのぞいても人は誰も見当たらなかった。駅員の姿すら見当たらない。疑問は大きくなるばかりだったが、出発の時間である十八時〇八分を車内の時計が示した。

「発車いたします」

誰もいない車内に自分の声が流れる。そして何万回聞いたかわからない、テープの案内音声 flowed.

“毎度、大野町営バスをご利用いただきまして誠にありがとうございます。このバスは大野駅発、前陣峠行の臨時バスです——”

ん？なんだかいつものテープの声と違うな……。違和感を感じた私の耳に次に入ってきたのは、こんな言葉だった。

“高橋さん、最後の運転。いつものように安全運転をお願いします。”

これは……、経理の原口さんの声だ。どうして原口さんが……。私の最後の運転に何かの趣向をこらしたつもりだろうか？ まったく、こんなテープを流してお客様が乗っていたらおかしく思われるじゃないか。

苦笑いを浮かべて、私は運転を続けた。

駅前のターミナルを出て両側に古い店が立ち並ぶ商店街の道を進む。今日は祭りがあるので、どの店も普段よりも早く店を閉めている。この町の商売人は皆、祭りの雰囲気を楽しみたくて自分の店を早く閉めて、お祭り会場で屋台の準備をするのだ。

バスはわずか百メートルほどの商店街を抜け左折をし、薄い水色の欄干の笹目橋にさしかかった。下には幅の狭い笹目川が流れている。この川は都会の川のように汚染されておらず、メダカやサワガニなども生息している。

東京から息子夫婦が帰省して、孫を笹目川に連れて行った時、孫は大はしゃぎで川遊びをしていた。メダカやサワガニなど都会では見ることなどできないだろう。

“次は笹目が原、笹目が原です”

笹目橋を渡ると、左側に広大な原っぱと田園が広がってくる。東京ドームでいうと何個ぶんだろう？ 十個なのか二十個なのかわからないが、そこにある田圃へと続く畦道の入り口に笹目が原のバス停は設置されていた。

畦道の先には古くから建っているであろう農家の一軒家がポツリ、ポツリと八件ほどある。そのうちの一軒が小田のおばあちゃんの家だ。

小田のおばあちゃんは腎臓病を患っていて毎週、月・水・金の三回、透析のためとなり町の病院へ通っている。病院の帰りに駅からバスに乗り込むと、必ず運転席の私の横にきて、今日の体の具合だとか、看護婦とこんな話をしただとか、病気とは思えない明るい笑顔で話してくれた。

小田のおばあちゃんとももう会えなくなるのか……。さびしく思っていると、今度はバスの案内テープからこんな声が流れてきた。

“高橋さん。いつもこんな年寄りの話を聞いてくれてありがとうね。わたしゃね、高橋さんのバスが大好きだったのよ。これからは乗れなくなるのがさびしいけど、長い間運転お疲れ様。本当にありがとうね”

おばあちゃん……。年配の方の独特の優しい、落ち着いた声のメッセージを聞いて、胸が熱くなった。同僚がおばあちゃんにテープにメッセージを吹き込んでくれるようお願いしたのだろうか？ 誰が考えたのか知らないけど、なかなか心憎いことをしてくれるな……。

――笹目が原のバス停にさしかかった。このバス停も乗客の待っている姿はなかった。

「まだ乗客は一人もないままか……。これじゃあ、臨時の便を出した意味がないな」

私の他には誰もいないので、声に出して呟いてみる。黙っていると、心の中がさびしさと埋め

尽くされそうだった。

笹目が原の広大な原っぱを抜け、十分ほど走ると右手にある御嶽山のふもとにこの町唯一の高校が見えてくる。

“次は田島高校前、田島高校前です”

彼は今頃どうしているのだろう……。このバス停でユニフォームに背番号四をつけた高校生が降りて行った時のことが思い出される。

田島高校の野球部は四年前、春の選抜高校野球にギリギリのところ選ばれて出場した。地方大会ではベスト8だった為、まさに出場可否のボーダーラインだったのだ。この町始まって以来の快挙に町の人々は大喜びで選手たちを励まし、応援した。試合の二日前に二百人以上の応援団で甲子園まで乗り込んだ。

しかし、田島高校は敢え無く一回戦で敗退した。スコアは二対一。名門校相手に善戦したが、最終回に内野手が痛恨のエラーをしてしまい、それが決勝点につながり敗れてしまったのだ。

敗因を作ってしまった内野手は二塁手。背番号四をつけた彼だった。

田島高校の野球部の生徒達は本当に一生懸命に戦った。エラーとなってしまった打球処理も無理をしなければ内野安打だけで済んでいたのだ。強い闘争心が結果として悪い方向に出てしまった。

それは監督もチームメイトも応援していた人たちも皆、わかっていた。もちろん背番号四の彼を責めるものなどいなかった。

田島高校の野球部が大野駅に帰ってきた時、学校が用意したマイクロバスに野球部の生徒たちは皆乗り込んだはずだった。

でも、一人だけ……。背番号四を付けた彼は私のバスに乗って来たのだ。一人でこっそりと学校に帰りたかったのだろうか。私もテレビで田島高校の試合を見て応援していたので、それが誰なのかはすぐにわかった。

「お疲れさん。よく頑張った！感動したぞ！ありがとう」

「……」

彼はうつむき、何も言葉を返さなかった。

「どうした？」

「すみません。みんな応援してくれていたのに、僕のせいで……」

消えさりそうな声で、肩を落として彼はそう言った。

「もう、野球は辞めようかと思います」

甲子園から帰ってくるまで、苦しい胸の内を誰にも話せずにしたのだろう。初めて会話をする私にこみ上げてくるものを抑えきれないように彼は言葉を発した。

「確かにあの時、皆がっかりしたよ。チームメイトも監督も応援している人も。だから、君は皆に対して借りを作ってしまったんだ。この借りは野球でいいプレーをして返すしかないんじゃないのか？」

「はい……」

「失敗を恐れずに積極的なプレーだったじゃないか。きっとそれが君のいいところなんだろう？
自分を見失うな。次こそは皆を喜ばせればいいじゃないか」

バスの発車時間が近づき他の乗客が乗って来た。会話はそこで中断され、バスは発車した――

そして、田島高校のバス停に着いた。

「元気をだせ。これからも前向きに頑張れよ！」

彼は私の言葉に涙ぐみながら頷き、帽子をとって九〇度のお辞儀をした。

「僕はこの先も野球を続けます。ありがとうございました」

日焼けした顔にこぼれた涙の美しさと吹っ切れたような笑顔が今でも心に焼きついている。

思い出に浸っていた自分に今度は若々しい青年の声がバスの案内テープから流れてきた。

“高橋さん。今までお仕事、本当にお疲れ様でした。四年前、高橋さんのバスに乗って励ましてもらった田島高校の野球部のものです。あれから僕は東京の大学へ進学して野球を続けています。まだ、応援してくれてる皆さんを喜ばせることはできていませんが、あの時の借りは必ず野球で返します。高橋さんの言葉、忘れません。ありがとうございました”

声だけしか聴いていないが、前向きに頑張っている、すがすがしい顔が浮かんでくるようだった。彼は必ず、立派な野球選手になって皆を喜ばせてくれるだろう。

「背番号四番、頑張れよ。期待しているからな」

テープの声に返事をするように私は上を向いて呟いた。

大野駅を出発してから二十五分。最後の運転の半分が終わった。改めて、今までの自分の運転手の仕事を思い返してみると、職業という二文字の言葉では表せない、たくさんの思い出がある。そんな仕事についていた私は本当に幸せ者だなとしみじみと思い耽った。

バスは田島高校のバス停を過ぎ、だんだんと上り坂になる道へと入っていく。私はこの道から見える景色がとても好きだ。西から差し込む、澱みのないオレンジ色の夕日が優しく町を照らしている。右手には、そんなきれいな夕日に照らされた建築中の大きな一軒家が見えてきた。いい場所に家を建てているな。以前から、ここを通るたびにそう思っていた。この家の施工主もきっとこの夕日が見える景色が好きなのだろう。

“次は山道入口、山道入口です”

ここにはボーイスカウトの宿泊施設がある。毎年、九月の初めに参加する小学生たちが、駅からバスに乗って、このバス停で降りてゆく。

そして、この施設の館長を務めているのが、私の飲み仲間の大槻だ。大槻は止まったバスの運転手が俺だと気付くといつもバスの中に顔をだして、次の休みはいつだ？と飲みに行く予定を聞いてくるのだった。子供たちがいる前で酒の話なんてするなとよく注意をしたものだ。

次のテープの声は大槻かな？ 確信めいた予想をしていると案の定、野太い大きな声が流れてきた。

“高橋、仕事辞めたら何時でも飲みに行けるな。楽しみにしてるぞ！”

今まで、感動的なメッセージばかりだったのに、オチでもつけたような言葉で笑ってしまった

。そうだなあ、もう休みの前の日じゃなくても酒が飲める。でもなあ大槻、こないだ話したろ。俺は仕事を辞めたらこの町を離れることになるんだよ。うれしいようなさびしいような複雑な気持ちだった。

山道入口のバス停を過ぎると、いよいよ残すバス停はあと一つとなった。残り十五分ほどで最後の仕事が終る。

皮肉なことに最後の運転となるこのバスには未だにお客さんが誰も乗っていなかった。でも、かえってよかったのかな。おかげで恥ずかしい思いをすることもなく思い出に浸ることができる。

“次は左陣池、左陣池です”

このまま、一人もお客さんが乗らずに最後の運転は終わるのかな。そう思ったその時だった。左前方、左陣池の畔に十五人ほどの人ばかりが見えてきた。

あれは……。その人ばかりの顔はすべて私がよく知っている顔だった。その顔はみんな笑顔で得意げな表情をしている。

バス停に着いて乗車扉が開く、待っていた十五人がぞろぞろとバスに乗って来る。照れくさくて、後ろを見ることができなかった。

「高橋さん、四十七年間、本当にお疲れ様でした。僕たちに高橋さんの最後のお客さんにならせてください」

同僚の運転手の笠原の声だった。

「私、一度は高橋さんのバスのお客さんになってみたかったです」

事務の沖田さんの声だった。

バックミラーから見える、同僚たちの顔をのぞき見る。今度は皆、優しい穏やかな笑顔を浮かべている。

「運転手さん、早く発車しないと定刻通り着かないよ」

大山所長の声だった。今まで自分以外、誰もいなかったバスの中に笑い声が響いた。

「そうか……。みんなで俺をはめたんだな」

「はめたなんて人聞きの悪い。こういうのをサプライズっていうんですよ」

「英語なんか言われたってわからないよ」

「アイム・ソーリー」

整備士の津田さんがおどけたようにしゃべる。二度目の笑い声がバスの中に響いた。

「大野駅に誰もいなかったのも、みんなで仕組んだのか？」

「ええ、駅員さんに協力してもらってね。高橋さんのバスが来たらバスから見えないように隠れてくださいってお願いしたんです。その時に駅にいたお客さんにも協力してもらってね」

「そんなことまでして、ずいぶんと大がかりなものだ」

私は呆れたように笑った。でも、その言葉は涙で詰まって語尾がかすれてしまった。

「では……、発車いたします」

私は涙で霏がかかった視界を拭い、バスを発車させた。

バスは日が暮れて暗くなってきた山の中を走る。終点まであと少し。でも、心の中はさびしさよりもすがすがしさに包まれていた。

“ご乗車ありがとうございました。まもなく終点、前陣峠、前陣峠です。”

前陣峠のバス停の奥に赤い提灯の明かりがたくさん見える。やぐらの白い照明と屋台の電球の明かりも見える。お祭り会場にはすでにたくさんの人が集まっていた。

バスはとうとう終点に到着した。

「ご乗車……、ありがとうございました。終点の前陣峠です」

運転手としての最後のアナウンスをすると、最後のお客さんとなった同僚たちが私の横の降車口にやってきた。

「高橋さん、本当に今までお疲れさまでした」

同僚の一人一人がこの言葉と一緒に花束を私に差し出してくれた。

車のエンジンを止めて、キーを抜き、運転席を降りる。そして四十七年間、パートナーとして頑張ってくれたバスにお礼の意味を込めてお辞儀をし、バスを降りた。

外ではお祭り会場に来ていた町の人々が私の方をみて、拍手をしてくれた。

「親父、最後の仕事、お疲れ様」最初に声をかけてきたのは息子だった。横には息子の嫁さんと孫もいる。

「今度は親父がバスのお客さんになる番だね」

「でも、すぐに東京に建てた家に引っ越すことになるんだろう？」

「なんで東京に引っ越すんだよ。新しく山道入口に建てた家で一緒に暮らすんだから。言ってなかったけど俺、隣町の支社に転勤になったんだ。都会での暮らしにちょっと疲れてしまってさ。転勤願いを出したんだ。親父がよく話してくれたあの場所に家を建てたらいいだろうなあって前から思っていたんだよ」

「あの家はお前が建てていたものだったのか……。なんだよ、みんなして俺をだましやがって。こういうのをサプライズって言うんだな」

やぐらの上から、屋台の中から、会場全体から再び、暖かい拍手が響いてきた。

私の最後の運転の終着のバス停は家族と同僚と町の人々のみんなの心の中にもあった。